
Carnival

明兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C a r n i v a l

【Nコード】

N 2 8 5 8 W

【作者名】

明兎

【あらすじ】

別のサイトで執筆していました

とある都会の街。

とある選別方法によって決められた七人の男女。

その選別とは、禁じられた手段である蠱毒だった。

それによって生き残った五人と二人が持っている現実に干渉する能力を『個毒』と呼ぶ。

しかし参加者のうちの二人、絵空出月と高坂日陰は蠱毒をせずとも

初めから個毒を持っていた。
この狂った街で、願いをかなえるための七人の戦いが始まる。

プロローグ

くだらない日常なんていらない。

俺がほしいのは少しの変化。

俺、えのそら いづき絵空出月の一日は基本的にあくびで始まる。

布団から上半身だけ起こして最初にする行動があくびだからだ。

それからだるそうに台所に置いてあるパンを口へと運んでむしゃむしゃ。

一人暮らしの質素な朝ご飯はもう慣れっこだった。

それから洗面所で歯を磨いて、それからの洗顔。

髪を全体的にチェックしてはねまくった猫っ毛を治らないかと五分間格闘。

そして挫折。

前髪を無理矢理矯正するように引っ張りながら学生服に袖を通し、もう一度あくびをしながら家を出る。

俺の朝は基本的にこんな感じだった。

学校に着くとまず寝て、授業も半分は寝ながら受ける。

それを注意する教師は既におらず、十月現在俺のことを指導できる教師などいなかった。

ある意味不良よりもたちが悪い不真面目生徒、それが俺だった。

そして俺の放課後もあくびから始まる。

向かない気分を無理やり向けて鞆へと荷物を詰めて、背負って帰宅。

もちろん部活には無所属だ。

一年三組のドアを潜って帰路へ。

と、思ったところそこに一人の女が立ちふさがった。

「出月、そろそろボードゲーム研究会に入る決意は出来たかしら？」

その少女の名前は黒崎 くろさき まどか 円という。

学校活動に非積極的な俺のことを案じてよく面倒を見る、学級長の
ような存在だった。

そして実際に学級長である。

「なんで俺がそんなあるだけみたいな部活に入らなきゃいけないんだよ」

めんどくさい話をまた振られたなあと思いつつ、前髪を弄りながら俺は黒崎へそう言った。

それに黒崎は言葉にならない呻きを上げて、目を吊り上げた。
もっとも元々目はつりあがり気味なのだが。

「あるだけって何よ！ 五年も続く立派な部活なのよ？」

「五年『も』ってお前この学校できてから60年目とかだぜ？」

囲碁将棋部でも十年は続いてるよ。というか囲碁将棋部とボードゲーム研究会ってのは別じゃなきゃいけないのか？」

「あー馬鹿にしたわね！ 部長に言いつけちゃうんだから！」

「はいはい、勝手にしろよ。じゃっ、俺帰るわ」

必死に止める黒崎を無視しながら出月は無理やり帰路へと着いた。軽く走って、音をかき消すためにヘッドホンを装着。

ノイズはシャットアウトに限る。

どうせ耳なんて聞こえなくても事故なんて起こりやしない。

——俺の元には……。

階段をおりて、玄関に着くと靴を履き替えるために靴箱を開ける。するとそこには一通の手紙が入っていた。

全体的にピンクっぽい色の女の子が好みそうな手紙だ。

「おいおい、ついに俺にも春が来ちゃった感じか！」

『視て』もいいけど、それじゃあ相手に失礼だよな。

とりあえず手紙に書いてある通りに体育館裏にでも行くとしよう。

今時、律儀に呼び出すなんてまだ日本も捨てたもんじゃないな。

相手はどんな子かな。

手紙に学年もクラスも名前も書いてなかったけど気になるな。

元氣っこ系後輩キャラとかいいね。

いや俺まだ一年だし、それはないか。

じゃあクールな先輩とか？

そんな先輩が俺に一目ぼれしてるとかそれかなりいいシチュエーションじゃねえか！

ヤバイ胸が高鳴ってきた！

そして体育館裏に着いた。

こういう時は第一印象が大事っていうからな！

というわけで、出月くん行きまーす！

「ばんわーっす、待った……………クズが」

そこにいたのはバットを持った男三人に、素手の男三人だった。そうかいそうかい、ラブレターに偽装した呼び出し状ねえ…………。まったくいい趣味してやがる。

「よう絵空、俺たちが書いたラブレターはどうだったよ？」

「…………ああ、最高だぜテメェら」

「おー喜んでくれたようで何よりだ！　じゃあそろそろ…………俺たちの愛の鞭でも受けてくれや」

こいつらは俺を怒らせた。

純情無垢な俺を女子の告白というドキドキシチュエーションに持ってきてだましたこと。

しかもその中に可愛いギャル一人でもいれば納得が行ったが男しかないこと。

そして何より、俺のテンションを空回りさせたこと。

ちよつと流石に俺も『視てみる』ことにしようかなあ…………。お兄さん久しぶりにキレちゃってるよマジで。

「うらあああ！」

そして俺はそのヴィジョンを視た。

頭の中にそれが入ってくるのは刹那もかからなかった。

『二秒半後、俺の頭にバッド直撃。俺のた打ち回る。十秒後、袋叩き。』

八分後、病院行き。』

完全な死亡ルートじゃねえか。

こりゃ意地でも回避しなくちゃなあ。

とりあえず後ろヘジャンプして、バットを避ける。

地面が抉れてちよつと、校長先生か庭師の人に謝らなきゃいけない状態に。

「おらよつと」

俺にバットを振ってきたやつ顔面をつま先でキック。

鼻が折れそうな勢いで蹴ったからもしかしたら折れてるかもね☆
知ったこっちゃねえ。

「さあ……………テメェら……………」

誰とも知らない男がブルりと体を震わせた。

だけど俺はもう容赦はしねえ。

こいつらをぶっ殺す！

「一人残らず地面と区別つかねえようにしてやるぜコラァァァ
！！！」

「かかれええ！！」

これが俺の日常だった。

何故か買ってもない恨みを押し売りされてかなり困ってる感じ。

まあ日常にいい感じのエッセンスになってるからいいんだけどな。

これでも俺の日常はつまらなすぎる。

くだらない授業受けて、それなりの生活して。
入院してる妹を愛でて。

どこが楽しい生活だこの野郎（ただし妹を愛でるのは幸せ）。

とりあえず従姉（この学校の教師ね）に学費もらってるから惰性
で通ってるけど正直もう面倒くせえ。

もっとどっぷり非日常にはまりたいものだけどねえ。

非日常、と言えばだ。

俺にも少しだけ非日常の要素が眠っていた。

俺は『ヴァイジョンハック未来選』と呼んでる未来を見るだけの能力。

それも便利なものじゃなく、同時に何秒何分と指定した時間の情報
が一气に入ってくるためかなり頭を使う。

しかも時間の範囲も十分後までだし、ものすごく微妙と言わざるを
得ない能力だった。

まあそれでも立派な能力だしまあいいかな、とか最近はや協気味。

家に着くと鞆を投げ捨てて玄関へと上がる。

ちなみに両親は八年前の事故で死んでいるし、妹もその事故で入院
生活を余儀なくされている。

つまり一人暮らし、男の夢と希望とロマン！

まあ、今となってはそうでもないんだけどな。

脱ぎ捨てた靴をそろえたときに俺は気が付いた。

あれ靴がなんか多くないか、と。

前述したとおり俺は一人暮らしだから、玄関にはあっても3足ぐら
いしか靴がない。

なのに今は4つ、しかも女物のヒールが余分に置いてあった。

———おいおい、美女泥棒が俺の心を奪いに来たってか？

語り口は冗談っぽいけど、内心かなり不安だ。
相手が女にしろ不審者が家の中にいるのだから。
一番不安なパターンは、女物のヒールを履いた男がこの家にいるな
んだけどな。

とりあえず未来を視てみる。
時間は二分くらいでいいかな。

『三十秒後、居間を覗くとそこにはスーツにメガネの女性がいる。
一分後、———』

ん……？

未来が……見れない？

昔からこういうことはたまにあった。

自分の中ではこれは未来を受信できなくなっただけと諦めていたが、
よく考えるとこれって結構おかしいことなんじゃないか？

未来が見れない、ってことはもしかして……突然死ぬ可能性がある
ってことなんじゃないか……？

そうだ、昔こういうことがあったときも、近くで事故があったり
したんだ。

そう———八年前のあの事故のときにも俺は未来を視て、違うな、
未来が視えて俺は車に乗らなかった。

あのときも未来をしっかり受信できずに、ただ危ないただけ警告が
きたから行かなかった。

つまり、今もそういうことなんじゃないか……？

………考えすぎか。

考えていても始まらないしな、とりあえず行くか。

「どちら様……ですかね？」

「私の名前は一之瀬 いちのせ 緋週 ひしゅう。よろしくお願いします」

礼儀よく頭を下げた女性は視た未来と同じで、スーツにメガネと
いういかにもな見た目だった。

まさしくOLみたいなな。

で、この……一之瀬さんか。

なんで俺の家なんかに入ってきたんだろうね。

「私の目的はただ一つです。あなたに『ポイズンカーニヴァル』
について伝えに来ました」

【始まる殺し合い】 1

ポイズンカーニヴァル……？

なんかのゲームみたいな名前だけど……聞いたことはないな。

いや待て、それがゲームだったとしてこいつはそれだけを伝えるためだけに不法侵入をしたと？

どんだけ異常なんだよこいつは。

「ポイズンカーニヴァルとは個毒を持つ有毒者七人に最後の一人になるまで殺し合いをしてもらうゲームになります」

「待て、殺し合いってなんだ！ それってゲームの世界とかの話なのか？」

「ゲームの話ではありますが、ゲームの世界の話ではなく現実世界での話になります」

「はあ？ ちょっと待て！ 本格的に何言ってるかわけわかんないんだが」

「わからないのならとりあえず私の話を聞いてもらってもいいでしょうか？」

しぶしぶ俺は了承して、一之瀬さんの正面に座りなおした。

この時点で俺はやな予感がしていたといいざるを得ないね。

いや、殺し合いとか言われてそうならない方がおかしいんだけどさ。

「まずこのゲームですが、予選がありました。あなたともう一人は例外的にシードでしたが他の五人は予選会を勝ち抜いてきた者た

ちです。つまり——もれなく人殺しです」

「——ッ!？」

「その予選、というよりもこのゲーム自体が蠱毒という大昔の呪いが元になっているのです。多くの虫を狭いビンに詰めて喰わせあい最後の一匹を作り出す。そしてその最後の一匹になったとき呪いが完成するのです」

淡々とした口調で語り続ける一之瀬さん。

だけど内容は淡々としてないんだけどな。

そもそも言ってることめっちゃくちやすぎんだろ。

いきなり殺し合いとか人殺しとか呪いとか言われてもこっちは付き合えねえっての。

「それで予選会——まあこちらとしては本腰のつもりでもあったんですがね。それで呪いは完成せずに中途半端な五つの個毒を作り上げて終了しました」

「質問。個毒ってのはなんだ？」

「あなたの未来を視ることが出来る能力のように、少し常識から外れた力のことを言います」

俺の「未来選」ヴァイジョンハックまで知ってんのかよ。

こりゃいよいよ凄いことになってきたんじゃないのか。

「で、あなたの未熟なのを含めて個毒を持つ七人をこの獣虫市じゅうちゅうしで殺し合いをさせ、真正銘の個毒を作り上げようというのがこのポイズンカーニヴァルの目的です」

つまり俺意外にもとんでも能力を持った人間が六人いるってわけだ。

それで殺し合い……ねえ。

それって俺の能力、いや個毒というべきか、がどれだけ役に立つんだろうね。

せいぜい未来を視るだけの能力でしかないのに。
しかもかなり使い心地悪いし。

それにしてもこんなゲームを思いついたのは誰なんだろうか。
一之瀬さんってのはあり得ないとして、誰なのかなんて予想もつかない。

俺の知り合いかどうかすらわからないしな。

「このゲームの開催主催者はだれなんだ？」

くすりやしちよう

「薬谷七曜。薬谷製薬の社長です。ついでに開催理由も言うのであれば幼少期より蠱毒という呪いに興味があつた為にこのゲームを開いたそうです」

薬谷七曜。

その名前は普通（まあ実際は有毒者らしいけど）の高校生の俺でも知っているくらいに有名な名前だった。

国内でも有数の薬品メーカーの若社長だ。

若干25歳にして会社を立ち上げ、そして大ヒット。

その結果、今の地位があるってわけだ。

「そんな人間が………か。よくわからないもんだな、人間って」

「多分あと数秒もすればあなたの携帯に他の有毒者の顔写真と特

徴が送られてくると思います。それを見て殺すべき相手を判断してください」

俺の疑問は無視かよ。

とか思ってる間に携帯のバイブが鳴った。

携帯を開いて画面を確認するとそこには見たことのないアドレスからメールが来ていた。

多分、今行っていた他の有毒者の顔写真と特徴ってやつが添付されたメールなんだろうな。

メールの本文に寄せられたURL。

そこからwebページへと飛ぶと、そこには七人の顔写真が載っていた。

更にその顔写真を押すことで顔写真のアップと特徴が載ったページに飛ぶといった感じだろう。

一番上は俺だった。

どこで撮った写真か、と思ったら学生証に使っている写真だった。本当にこんなのだっから入手してくるのかね。

とか思いつつ俺のページはスルー。

とりあえず他六人の顔をパラッと確認。

六人の髪の色は黒に赤に青に緑に金に白に茶色にとバラエティーに富んでいたため忘れようもないな。

なんだお前ら〇〇戦隊とか作る気ですかこの野郎って感じ。

まあ、冗談はさておいてだ。

「なあ一之瀬さん。この『高坂日陰』こうさか ひかげってやつは何者だ……？」

「ほう、見ただけでわかりましたか。そうですね、高坂は一言で

言うなら……化け物です」

その後「それがあなたと同じく予選をしていない人間でもありますね」と付け加えた。

俺はこの顔写真を見た瞬間に背筋に冷たいものが流れ混むのを感じた。

なんとも言えない怖さを感じたんだ。
この時同時に俺は密かに心に誓った。

——こいつと戦うのは極力避けようと。

「で、この………ポイズンカーニヴァル？　ってさ拒否権はないわけ？」

「ないですね」

即答かよ。

まあ、予想はしてたんだけどな。

「だってさハイリスクノーリターンで殺し合いなんてさせれるなんて嫌に決まってるだろ？」

「では、リターンがあるといえば殺し合いに参加すると？」

「まあそれもおかしな話だけどな。どちらにせよ参加しなきゃいけないならとりあえず話は聞いとくよ」

「優勝者には……願いを一つ叶えられる権利がもらえます」

「へえ、そりゃどんな願いでもいいのか？　例えば――」

「――例えばあなたの妹を治療するとかもですね」

「ッ！？　なんでお前らがそれを知っている……？」

「知らないわけがないでしょう。安心してください参加していた
だけのなら手は出しませんよ」

参加してただけるなら……か。

これで参加せざるを得なくなったわけだ。

参加しなければ俺の妹―――――― 柩がどうなったかわかったもんじや
ない。

このクズ共が。

「……………」

「考えることはないでしょう？　参加しますよね」

「ああ、わかった。……………参加しよう」

こうして俺は殺し合いの中に身を投じることになった。

柩を守るために俺は立ち上がる。

絶対に負けられない。

生き残って柩を治療してやる。

それで、あいつにもう一度希望を持たせてやる。

表面上の感情はそんな感じだ。

いやある意味本心でもある。

だけど違う。

俺がこの狂ったゲームに参加しようとした理由は………日常から外れるためだ。

少しおかしい日々飛び込めるから。

そんなことのために俺は命を掛けるのは馬鹿馬鹿しい。だから俺の戦う理由は、妹を救うためだ。

そして俺は立ち上がり、玄関へと向かった。

一之瀬もすたすたと歩き、窓から外へと出て行った。

玄関を見てみるといつの間にかヒールは消えていて、少し疑問に思っただけどまあそんなことはどうでもいいか。

……まあ実際はかなり気になるんだけどさ。

「って流石に手ぶらでいるのはマズイよな。せめて何か武器持っていないと殺してくださいって言ってるみたいなんだし」

つつても大した物もないしどうしようか。

包丁なんかまず相手に刺せるとは思えないし。やっぱりもつとりーチの長いものもいいよな。

玄関で引きながら俺は考える。

そして目の前にあるそれに決めた。

それはバットだ。

木製もいいけど振れる気がしないから金属で充分だな。

傘立てにささってるそれを手に取り握り心地を確認する。不思議としっくりきた。

昔からこれを使い続けてきたかのような感覚だ。
まあ、俺サッカー少年だったけどな。

「まあこれなら頭と胸だけ狙わなければ死ぬこともないだろうしな。よし、そろそろ行くか」

俺は玄関を開けた。

一歩目をしっかりと踏みしめると、すぐ近くに何かがいた。

そこには美少女が立っていた。

青色の髪を肩のあたりでまとめた姿で服装は弓道着みたいな袴。

で、その袴がはちきれんばかりの巨乳。

絶句しそうなほどの美少女がそこにいた。

「私の名前は舞崎まいさき 水樹みずき。争いを嫌い、平和を望む非戦闘主義者です」

そういう舞崎の手には薙刀が握られていた。

俺の持っているバットなんかよりよっぽど戦闘に向いている武器を持って、舞崎さんは何を言っているんだろうか。

ちよっと言ってる意味わかんないかなー？

「……あなた私を信用してませんね？ 私はその数十倍くらいはあなたのことを信用していませんから」

「えーと、俺の心をへし折るのが目的？ だとしたら効果は絶大だったみたいだけど」

「そんなことはありません。私は争いを好まないのと同じくらい破壊も好みません」

「じゃあ何が目的よ？」

「私と一緒に葉谷製薬にクーデターを起こしましょう」

……………見た目とは裏腹に飛んでもない性格してるなこの人。

とうるか争い嫌いって言ってるのにクーデターしよう、ってなかなかの矛盾だぜ？

なんというかもう俺はついていけねえよ。

「断る。俺は妹を人質にとられてるみたいなものなんだ、下手なことはできないね」

「私は……家族全員を人質にとられています」

「じゃあなんでそんなことを考えられるんだよ。普通に考えておかしいだろ」

「だから、です。人質にとられているからこそ葉谷製薬はクーデターを起こされるなんて考えていないでしょうから起こすのです」

まあ理には適ってるんだけど、それ以上の何かが違うっていうか……。

そうか、こいつ家族を道具にしかとらえてないみたいなんだ。おかしいと思ったのはこれか。

言ってることは確かに正しい。

得るものは確かに大きい。

そりゃ自分の命の安全が手に入るんだからな。

だからと言ってそのために家族を犠牲にするなんて狂ってると思えない。

「俺はクーデターに協力しない。舞崎の考え方には共感できないからな」

「ほう……。と言いますとどういう……?」

「お前の考え方は自分が助かるために家族を犠牲にしようとしてる。俺はそんなやつと協力するなんてできないね」

俺の言葉に舞崎は何かを考えるように顎に手を当てた。

そして考え事が終わると水のように柔らかな笑顔を浮かべて俺の方を向く。

一瞬攻撃されるんじゃないかと考えたが、そんなことはなかった。

「合格です。あなたは争いを好まない人間の様ですね」

「……はあ?」

舞崎の言っている言葉の意味が解らなかった。

合格ってなんだよ。

「よかったら……私と一緒に組みませんか? クーデターとかそういう意味ではなく単純にこの殺し合いを生き残るために」

「わかった。だけどその前に一つ質問だ。舞崎は予選会でもう人を殺してるんだよね?」

そうだった。

俺と高坂以外の人間は全員予選会で人を殺してるんだ。それはこの舞崎水樹も例外じゃない。

「私は予選会で人を殺してはいません。逃げ回ってるうちに予選会が終了していたのです。まあ、信じるかどうかはあなた次第ですが」

「まあ……信じるよ。否定する材料がないしな」

俺としても仲間はほしかったところだ。

こんな信用しきれないやつでも、まだ見ない誰かよりは全然マシだ。それに舞崎は雰囲気からして人殺しをしなさそうではあるからな。

「では、私と行動を一緒にしていただけると？」

「ああ、いいぜ。ただし俺は健全な高校生だから目の前でそんな胸を強調した服を着た巨乳さんを見て興奮しないとは限らないぜ？」

「……………もし触りたいのなら触っても構いません。その場合一分後まで首がつながっているとは限りませんが」

「舞崎って絶対平和好きじゃないよな……？」

「質問の意味を図りかねます。では行きましょうか」

と踵を返して歩きはじめる舞崎の背中を俺は黙って追った。

どこに向かおうかと尋ねようかと思ったが、動きが適当だったから多分舞崎自身もどこに行くか決めてないんだろう。

まあ女の子に振り回されるのは黒崎でなれてるからいいんだけどさ。

適当に歩いて流れ着いた先は街だった。

俺と舞崎はあたりを見渡して近くに特徴的な髪の色をした人間や、

携帯で見た人間がいなか探していた。

だけど逆に言えば俺と舞崎も残りの五人からすれば探されている対象なわけで。

俺はともかく舞崎の髪の色やこの格好はかなり目立つからすぐに見つかりそうで怖いな。

こうして見つめた街はいつもとは違う色に染まってるように見えた。

いつもは気楽に歩いている街並みが今日は気を張って歩かなくちゃいけない。

その変化が俺の心に小さく乗っかっていた。

そういえば……舞崎の個毒はなんなんだろう？

相手の心を折る個毒だったりして。

……………まあ、冗談だけどさ。

「あのさ、舞崎」

「水樹でいいです。信用している相手には名前で呼ばせています。だから私もあなたのことを出月と呼びますね」

「じゃあ水樹。水樹の個毒ってなんなの？　ってかなんで俺の名前知ってんのさ」

「私の個毒は、『虚式』^{むなしき}。人の筋肉を見ることが次の動きを予測する能力です。全員の顔と名前は参加者全員は把握しているはずでしょう」

なんというか俺の個毒に近い能力だな。予測と確定という違いはあるんだけど。

それに時間という範囲も随分違う。
水樹のはその場、俺のは未来もだ。

「というかそんな簡単に教えていいのかよ？ 一種の切り札みたいなもんだろ、それも」

「さっきもいいましたけど私はあなたを信用しているのです。わかったら早くあなたも個毒を教えてください」

そんなにはっきり断言されたら少し照れるな。

まあ嘘だけどさ。

というわけで俺も個毒を水樹に教えることにした。
するとさっきの俺と同じような動きをしたため、多分同じことを考えてるんだろう。

「私のものとは規格が違うかのような能力ですね。確か出月は予選会をしてないうちの一人ですよね？」

「ああ、そうだ。ってなんでそのこと知ってるんだ？」

「私のところにきた案内人、三ツ木さんが言っていましたから」

全員案内人が違うのか。

まあそんなことはどうでもいい。

「だから俺は本当の意味で戦闘経験がないんだ。もしかするとお前の足を引っ張るかもしれないが、それでもいいか？」

「何を今さら。それさえも理解して誘ったに決まってるじゃないですか」

「そりゃそうだよな」

俺は軽く笑った。

水樹は笑わなかった。

軽く傷つくんだぜ、こういうの。

「にしても……平和な街ですね」

とか言いながら水樹の服の袖には伸縮できる薙刀がしまわれている。

なんて物騒な。

というか水樹はいろんな意味で人の注目を集めてるな。

服装と言い髪と言い胸と言い。

俺が関係ない一般人だったなら絶対声かけてるレベルだな。

「水樹はこの街の人間じゃなかったのか」

「いえ、この街の人間ですよ。ですが、こういうところに来たことはなかったの……」

「ん、どうしてだ？ 病気だった……とかか？」

「違います。親が厳しくて一日中武道ばかりやっていたものですから。それも最近卒業したばかりなので全然街に出たことがなかったの……」

そういう水樹はどこか緊張しているように見えた。

ああ、だから適当に道を行っていたのか。

そりゃどこに行けばいいかなんてわかるはずないよな。

てかこれって他の人から見るとデートみたいじゃないか？
だとすれば俺ただけ羨ましい人間なんだよ。
やべえちよつとテンションあがってきた。

「……今、何か気持ち悪いことを考えませんでした？」

「……………気のせいじゃないか、うん」

水樹には冗談も嘘も隠し事も通じないみたいだな。
見た目は柔らかそうなのに性格は結構お堅い感じか。
こりゃあまた人気の出そうな要素で。

それから三十分歩き続けても他の有毒者を見つけることは出来なかった。

やっぱり相手も姿を隠してるからなかなか見つからないのか。
水樹は歩き疲れて隣で座っていた。

ここは気を効かせてジュースでも買ってきてやるべきかね。

「今日はこの辺でやめにしましょうか。特に制限時間も設けられていないのに一日目から動きすぎるのは得策ではありません」

おーっと俺の珍しい善意が踏みにじられたぜ。

……まあいいけどさ。

それはともかく水樹の意見に俺は賛成だった。
ぶっちゃけ学校から帰って今はもうだいぶ日も落ちてくる時間だったから、これから他の有毒者との戦闘になると戦闘慣れしてない俺は特に分が悪い。
だからこそその撤退、だからこそその中止だ。

「それもそうだな。よかったらさ、うちに泊まっていかないか？」

「私を襲う気ですかこの変態！」

「違えよ！？　なにその失礼すぎる思い込み！？」

「だってあなた……私の胸がどうこうって言ってたじゃないですか……………」

ああ……そういえばそんなこと言ったね。

まあそれも本心なんだけども、ぶっちゃけると俺って妹以外をそういう目で見れないんだよな。

あー俺って超シスコンじゃなか。

そんなことは知ってるんだけどさ。

「大丈夫だ、俺は妹以外をそういう風に見れないんだ」

「余計にあなたが怪しい人間に見えてきました」

「水樹を襲わないことはよくわかっただろ？」

「……まあ、それもそうですね。わかりました」

というわけで人生で初めて俺の家に女の子が泊まりに来るようになった。

本気で興奮はまったくしてない。

だけど寝顔くらいは写真に収めておこうと思う。

野郎の友達共に売ったら高く売れそうだな。

「何か今ものすごくダメな考えをしませんでした？」

「なんのことだかさっぱりだな」

そういつて俺と水樹は家へ帰ることにした。

帰り道ずっと水樹の視線が鋭く俺の背中を刺していたのは気のせいだろう。

それから本当になんのイベントもなく夜が明けた。

二人とも健全に十一時には寝てた。

年頃の男女が一つ屋根の下で一晩過ごして何もないのは逆に問題だ
と思うんだ。

俺がヘタレじゃないってのは理解していてほしいね。

「では今日も他の有毒者を探しますか」

「そうだな。とりあえず俺は着替えてくるよ」

「わかりました。私も着替えるのでこの部屋に入ってこないでくださいね」

「へいへい、了解しました」

ここ俺の家なんだけどなあ。

とか内心でちょっとだけ思いつついつも通りの朝の行動。

洗面所では磨いて、顔洗って髪治してっと、これで準備完了。

服は………私服って言っても特にないんだよな。

とりあえず制服でいっか。

着替え終わって居間へと。

そういえば水樹が着替えてるから入っちゃいけないんだっけか。
もう着替え終わってるかもしれないし、一応聞いてみるかね。

「水樹、もう着替え終わったか？」

「はい、もう終わりましたよ。入ってきてください」

ドアを開けて居間に入るとそこには見事に昨日と一緒に胸が強調された服を着ている水樹がいた。
やっぱり巨乳はいいものだね。

まあでかければなんでもいいわけじゃないけどさ。

「では出かけましょうか。今日こそ協力者が増えるといいですね」

水樹はそれを本気で言ったのか、それとも皮肉で言ったのかはわからない。

だけど俺はこれ以上協力者を増やすのは無理だと思う。

正直俺と水樹が組んでいるの自体が異常な状態だ。

それにさらにもう一人このチームに入るなんて常識的に考えて不可能。

だけどそれを正直に水樹に伝える勇氣は俺にはなかった。

「そうだな、敵が減るといいな」

俺は誤魔化すように曖昧な表現でそう言った。

自分でも少しずるいと思ったね。

そういうわけで俺より先に水樹が玄関を出て、家を飛び出した。
どこか無邪気にも見えるその姿を目で追いながら靴を履く。
いつもの靴ではなく運動しやすい物。

不思議とこの靴で学生服を着ているとそれなりに動きやすかったりする。

「まだですか出月」

「今出るっての」

そうして俺もバットを手にとってから玄関を出た。

これが俺が望んでいた非日常の第一歩だ。

何が起るかも、何があるかも全く予想の着かない未来。

もちろんそれは俺の個毒で見ることとはできない十分以降の未来だ。

さて、俺も覚悟を決めるか。

———殺し、殺される覚悟を。

今日水樹が歩いているルートは昨日とは違うルートだった。

出来るだけ人通りの少ないところを通る作戦のようだ。

まあ、昨日の結果を考えればまともな判断だろう。

にしても……………随分と薄暗い道を選んだな。

ビルとビルと公共の建築物の隙間。

そんな場所がここだった。

ここならもしかすると本当に一人くらい有毒者がいるかもしれないな。

薄暗さこそはあるがしつかりと明かりはあって、ある程度周りも確認できる適度な明度だ。

人を襲い、殺すにはうってつけの場所だな。

と考えていたとき、突然爆発音が鳴り響いた。

爆発音と言っても爆竹などのように音が高く大きいだけで、振動自体はほとんどない。

音は結構近かったな……。

「水樹、早くいくぞ!」

「わかっています。争いは止めなくてはいいけませんから」

俺と水樹は走り出す。

服装的に水樹は走りにくいかと思ったんだけど、結構普通に走れていた。

俺も普通に走れているくらいだから、服装の相性とかも関係あるんだろうか。

そして爆発音の発生地近くへとだんだんと近づいていく。

すると爆発音の数も増えていく。

こんな街中で容赦なく爆発物を使うなんて有毒者の可能性が高い。というか多分そうだろう!

「もう少しで着きます」

「わかってる!」

俺は手に持っているバットを、水樹は袖にしまっていた薙刀を取り出して手で強く握った。

来る初戦闘に向けて改めて精神を集中させる。

相手が高坂でないことを必死に祈っておくか。

流石にあれといきなり戦うの———というかいつでも戦うのは極力避けたい。

「見えたぞ！ 誰かと……戦ってる……？」

「それはそうでしょう。じゃなきゃこんなところで一人爆発なんてさせるはずがありません」

ああ、そりゃ確かにそうだ。

じゃあ早くしないと誰かが殺されちまう可能性もあるのか！
急がねえと……っ！

そうして走っていくと逃げている一人の女の子が見えた。

その子は茶髪の後ろでお下げの様にまとめた髪を揺らしながら何かから逃げていた。

その姿はあの有毒者のリストで見たことがあるな。

俺がそう思った途端に少女の足元が爆発する。

少女は前かがみに転び思い切り体を打っていた。

そして姿を現した攻撃をしていた方の人間。

それはオレンジ色の髪の短めの髪型をしていて、一見するとかなり可愛い外見だ。

もちろんこのオレンジ色の髪の少女も有毒者のリストで見た人間だ。ってことはこの近くに四人も有毒者がいるのか……。

「水樹はあの茶髪の女の子を追ってくれ！ 俺はあのオレンジ色の女の子の方を足止めしとくから！」

「あなたにそれができるのですか？ それなら私が残った方が――」

「水樹の能力的にあの子の攻撃方法とは相性が悪い。だから俺が――」

足止めをしてくる。これじゃあダメか？」

「……………わかりました。無理だけはしないでくださいね」

「当たり前だ！」

そういつて俺と水樹は二手に分かれた。
位置的に俺の方が先に相手と出会うだろう。
緊張するな、本当に！

「あーん、お兄さん何よ？ ……って有毒者だね、お兄さんも」

相手も俺の顔を覚えていたらしくすぐに有毒者だとバレてしまった。
まあそりゃ六人くらいすぐに覚えられるよな。

「そうだ。名前は絵空出月。まあ覚えておいてくれよ」

「うちの名前は爆宮 はぜみや 花火 はなび。覚えてくれなくていいぜ、どうせすぐに死ぬ」

へえ、俺が殺されるってか。

まったく物騒な話だな……。

じゃあ殺されないように頑張らなくちゃな。

とりあえず未来を視ておかなくちゃな。

そうしなきゃここに立つのさえ、怖くて仕方ない。

とりあえず手短に一分だ。

俺は少しだけ意識を頭の中へと移した。

『十秒後、爆宮が構える。

十一秒後、直後爆発物が俺を襲う。

十五秒後、それを受けた俺は近くの壁に背中を打ち付ける
三十秒後、それからも爆撃を受け続け気を失う』

やばい、これ絶対死ぬ。

俺はバットを構え、逃げる準備をする。

爆宮と正面から戦ってたら勝ち負け以前に死ぬっ！

逃げつつ機会を待って攻撃、まさにヒットアンドアウェイ。
それしか未来を視るしか力のない俺には勝ち目がなかった。

「じゃあ行くぜ絵空！」

直後爆宮は両手にいくつもの爆発物（花火や爆竹）を構えた。

それを見る前から俺は足を動かし建物の蔭へと逃げ込む。

建物の蔭に入った瞬間花火や爆竹の破裂音が辺りに響いた。

俺は更に建物の奥へと逃げる。

「なあなあお兄さんよ！　うちの姿見たことないか！」

何を言っているんだこいつは……？

そりゃ携帯で見た。

だけど多分そういう意味ではないんだよな……。

爆宮花火……まさかこいつっ！？

「もしかして気づいた？　そうだと爆撃暴行少女爆宮花火だよ」

一年前、ヤクザの事務所に爆発物を大量に持ちこんで20人近く
を重傷を負わせた爆撃少女。

事件を起こした当時18歳だったにも関わらずそのあまりの残虐さ故に無期懲役をくらった少女だ。
それがなんでこんなところに！？

「葉谷のおっさんの好意らしくてさ、予選に出る代わりに刑務所を出してもらったんだぜ。結果優勝しちゃって、この本選にも出ることになったんだぜ」

話し声を振り切るように走っているはずなのに、なかなか距離を取ることができない。

爆宮はこの辺を知りきっているからかなのだろうか。
もしそうだとすれば追いつかれるのも時間の問題だ。

「うちの個毒は、まあおいおい見せるとしてだ。そろそろお前を殺しにかかるぜ」

直後、天井が爆発して崩れた。

なんとかその回避には成功したが、道がふさがってしまった。
これで逃げれるルートが一つ減ってしまった。

まさか爆宮、これで俺を追いつめていくつもりか……？
だとするとこの建物裏ってのは分が悪い！

急いで建物の陰から抜け出そうとするが、その度にその場所を爆発され道をふさがれる。

詰将棋のように一手ずつ確実に死へと近づいているのがわかった。
これが殺し慣れた少女の確実な殺人法なのか……！

落ちてくる瓦礫や天井を避けて、やっとの思いで建物の陰を抜けるとそこは、最初に俺と爆宮が出会った場所だった。
結局ここに戻ってくるしかないのかよ！

だけど爆宮がここに戻ってくるまでまだ時間はある。

それまでに未来を視て、これからの行動を考えておくべきだろう。

俺は個毒、『未来選』を発動した。

『十五秒後、爆宮が俺の目の前に現れる。

十七秒後、俺の背後が爆発する。

二十秒後、それに油断した俺が爆宮に爆弾を投げ込まれる

二十二秒後、倒れた俺に爆宮がのしかかる。

二十五秒後、額に銃を突きつけられる。

三十秒後———』

「おい……なんだよこれ……」

気づいた頃には、俺の未来はだんだんと絶望の色に染まり始めていた。

【始まる殺し合い】 2

未来の開始が十五秒後だから時間がない。
行動を開始するなら早くしなくちゃだな……。

未来を視たことで新たにわかったことが二つ。
俺の後ろには起爆式の爆弾が仕込まれていること。
多分俺を追うときに仕込んでおいたんだろうな。
これのせいで俺の逃げ道は狭まっているといえるだろう。

そしてもう一つは、爆宮が拳銃を持っていることだ。
さっきまでは爆発を経由して間接的に俺を攻撃することしかしなかったが、しようと思えば拳銃で攻撃される可能性もある。
今使わない理由としては多分使い慣れていないのだろう。
だからギリギリまでバラさずに、殺す直前のみで使う。
かなり考えられた作戦だ。

とりあえず俺はさっき隠れた建物とは別の建物の中へと入った。
さっきの場所には爆弾が仕掛けてあるため、いたら絶対に死亡するルートに巻き込まれる。
だからこそどこかへと逃げる必要があった。

それで逃げ込むことに決めたのは、近くに建物が密集している建物の中だ。
そうすれば建物の中が爆破されたなら別の建物に逃げることでできるから。
ついでに言うとそのときに瓦礫に巻き込まれて花火が俺たちを追え無くなればもっと都合がいいんだけどな。

まあそこまでは望みすぎにしても、水樹と水樹が追っている有毒者が集まればそれで三対一の図が作れるため時間稼ぎをする必要があった。

だからこそこのこの建物の中だ。

この建物なら俺の個毒と併用して、時間を稼ごうと思えば三十分近くは余裕だった。

「にしても、追って来ないのか……？」

建物の二階部分まで俺は逃げてきているというのに、爆宮は俺を追ってくる気配がない。

気になったため、窓からのぞいて外で待ち伏せをしていないか覗く。するとやはりそこに爆宮の姿はなかった。

じゃあ……どこに行った……？

いや、待てどう考えて答えは決まってるだろ。

俺は何故この建物へと逃げ込んだ？

水樹たちが逃げる時間を稼ぐためだ。

じゃあ、俺がこっちに逃げたら爆宮は水樹たちを追えるようにはならないか……？

てことはあいつはもう水樹をッ！？

となるとやべえ！

早く追わねえと。

俺がこの建物に逃げ込んでから何分経った！？

今から行って間に合うのか……！？

「チィッ！　ふざけんなよ……」

そして俺は階段を降りて、一階へと行き俺と爆宮が遭遇した広場

には行かないように逆の道から向かうことにしよう。
そうしないけど俺の死の未来が繰り返されてしまう。
そしてドアに手をかけ、外へと出た。

「ようお兄さん、待ち遠しかったぜ。さあ、いっちょ爆ぜてみようか」

ドアを開けた目の前には爆宮が立っていた。

嘘だろっ!?

だってこいつは水樹たちを追って……。

いや、違うそれは俺の勝手な思い込みだ。

こいつはそれさえも全て計算して!?

俺がそう考えた頃には目の前が爆ぜて俺の体は後ろへ吹き飛んでいた。

建物の壁に背中を思い切り打ち、偶然後ろにあったマットがなければ全身を打ってここで積んでいただろう。

目を開けてみると俺の体はいろいろな部分が火傷していた。

そりゃあの距離で爆竹やら花火やらを爆発させたんだからこうなるのも納得だろう。

火傷がひりひりと染みていくように痛い。

それでも俺は手に持ったバットを離していないことに安堵した。

にしても爆宮はなんであの距離で爆発なんてことを……??

あんなことすれば自分だったただではすまないはずだ。

遠目でうつすら見える姿でも手に小さく火傷をしている。

だけど、何故か痛がる様子はない……??

「あとお前に残された制限時間は残り十分ってところじゃんさ！
さっさと爆ぜろよ」

倒れている俺に向けてまた花火と爆竹が向けられる。
体を倒して避け、そのまま窓から外へと逃走した。

あの広場とは違う建物の蔭にまた姿を隠して走り、時間を稼ぐ。

やっぱり火傷した体と右足が地味に痛む。

これだから火つてのは扱いを気をつけなくちゃな……。
ってそんなこと言ってる場合じゃないか。

その後もなお聞こえてくる爆発音から俺は逃げた。
姿なき破壊者、音だけの殺人鬼。

それだけが俺には怖くて逃げ続けていた。

逃げ続けるだけじゃ未来はつかめない。

だけど俺が持つ武器はバットだけ。

それこそ水樹以上に爆宮との相性は悪い。

近づくことができないんじゃないじゃバットでの攻撃なんて当てられるわけ
がない。

どうしたものか……。

未来を視て行動を予測して攻撃にうつってもいい。

だけどそれじゃあ、視る瞬間に一瞬だけ隙ができてしまう。

文字通りの手詰まり、未来が視えてこない。

俺の死はもう予定調和だったのかよ……。

そんなの……ふざけんじゃないやねえっ！

「クソ！？ 考えろ……生きるための手段を考えろ……」

考えるべきなのは爆宮の個毒だ。

爆発物なんかよりも圧倒的に常識から逸脱しているそれに対して考えをめぐらすべきだろう。

問題点としてはそれがもう発動されているかどうかだ。

「おいおいお兄さん、鬼ごっこなんてしたくないぜ？ 早く捕まっちなよ！」

使っているとすればある程度の目星はついてくる。

一番の可能性としては身体能力の上昇。

鍛えているといっても元の性別の差もあり、俺に簡単についてくる身体能力は普通ではないだろう。

それに、あれだけの爆発物を投げ続けるのもなかなか体力がいるはずだ。

もしくは……ダメージを軽減する能力。

いや違うな。

あの様子からすれば痛みがなくなる能力、痛覚遮断の能力か……？
そして制限時間はあの発言から十分。

だとすれば後七分もすれば俺に攻撃のチャンスが回ってくる！

だけど逃げ切れるか……？

もちろんだが俺の身体能力はともじゃないけど高くはない。

未来を視るのは時間的に厳しい。

逃げるためにはどうすればいい……？

「考えろ、生きるための手段を考えろ……。どうすれば俺は生きれる……」

この場合に限っては殺す必要はない。

ただこの場を生き残るだけでいい。

そうすれば後に有利な状況を作れるんだから。

とすれば俺は勝たなくていいだけじゃなくて、戦わなくてもいいってことだよな。

隠れることも選択肢に入るのか。

だけど爆宮みたいな広域型攻撃タイプから隠れるのは簡単じゃない。下手すれば巻き込まれて偶然死ぬ、なんてのもありえるからだ。

だとすれば……やっぱり戦うしかないのか。けどもリスクが高い作戦をすることになるな。失敗すれば死、成功すれば生存。わかりやすい二択でいいじゃねえか。

さて、あの広場に行くか。

俺の人生初の命を懸けた賭けだ。

ちよつとだけ、スリルを楽しもうじゃねえか。

それくらいじゃなきゃ面白くねえもんな。

俺が望んだ非日常ってのはそうだよな、死と生が背中合わせで触れ合うような世界だ。

——ちよつと、俺もいい感じに壊れてきたかな

そう思いつつ広場へと走って行った。

体力も考えず力の限りに走った。

広場に着くと俺は急いで個毒の能力限界値、十分後までの未来を一気に視る。

花火との距離はいままでの中で最大の量だけ取っていたから、視るだけの時間はあるから問題ない。

問題はその情報を頭で処理してなおかつ記憶できるか。
勝敗はそこで左右される。

「出来るできないじゃなくて、しなくちゃいけないよな。未来を
ヴァイジョンハック
ここに……未来選！」

頭の中に今後十分で起こるすべての未来が流れ込んでくる。
余りの情報量の多さに一瞬膝を地面に着きそうになるが、なんとか
耐え抜く。
そして俺は十分間の未来をすべて頭の中に叩きこんだ。

「へえ……いよいよ死ぬ覚悟ができたかい。じゃあ爆ぜてみよう
か」

「俺は死ぬ覚悟なんてできてない。俺ができたのは生き抜く覚悟
だ」

「知ったことか！ さっさと……爆ぜろ！」

爆宮がそういうと同時に右斜め前へと飛んだ。
その直後に俺の背後が大きい音を立てて爆発した。
仕込んでいた爆弾の位置がばれたことに驚いたのか、爆宮は顔を驚
きの色に変える。
だが俺はそんなの関係なしに走り出す。

俺が視た未来なら次の爆宮の行動は二発の花火と一発の爆竹を投
げてくることだ。
まずは花火でけん制し、次に爆竹で俺の視界を奪う。
花火は俺に当たらない、つまり俺は避ける必要がない。
打ってきたのを見て、まっすぐに走り出す。

そして一秒程遅れての爆竹の投擲。

走るときに構えていたバットをもう一段階後ろへと引く。

距離とタイミングを見計らって思い切り振った。

見事に爆竹にバットは直撃する。

バットに打たれた爆竹はまっすぐと投げつけた本人の元へと帰った。

跳ね返ってきた爆竹に驚く爆宮。

身がかがめてそれを避けようとするが、避けるよりも早く爆竹が爆ぜる。

音に驚いて後ろへと逃げざる爆宮。

その間も俺は勢いを殺さずに走り続けていた。

そしてバットの射程距離まで近づく。

俺の接近に気付いた爆宮が爆竹を構えるがもう遅い。

それを蹴り飛ばし逆の足で体を蹴りつける。

「うあっ!？」

バランスを崩した爆宮の体。

それを見て俺は思い切り拳を振りかぶる。

そして爆宮の体へと思い切り打ちつけた。

体中の空気を吐き出す爆宮。

俺は未来を視て爆宮の個毒を知っていた。

それはやはり痛覚をなくす能力、名前は自分で【自爆劇】と呼んでいた。カミカゼペインター

時間制限は十分間で連続使用する場合は間に十分は間を開けなくてはいいらしい。

痛覚をなくす能力、しかしそれはダメージをなくす能力じゃない。
腹をければ痛みはなくとも体中の空気を吐き出すし、腕を折れば使えなくなる。

つまるところ痛覚をなくすだけで、それ以上の能力じゃないのだ。

だから俺は個毒の効果が切れるまでひたすら攻撃を繰り返す。
残り二分間一切の防戦に回らずに攻撃を続ける。
それが俺の出した答えだった。

攻撃をするたびに一秒後の未来を視て、もしもの反撃にも備えることを忘れない。

一秒程度ならかかる時間はほんの刹那。

気に掛けるほどではない。

最初こそかなりの力で攻撃したが動きを妨害する程度の威力でしか俺は攻撃していなかった。

相手が爆発魔であろうと女子なのには変わらない。

流石に女子を一方的に殴り続けるのは抵抗があるからだ。

赤子の手をひねるように、ハエでも叩くかのように、ただ払うだけの攻撃だ。

「テメエ……この爆撃暴行少女花火ちゃんを………舐めんじゃねえぞ！」

俺の攻撃を無理やりに押して距離を取って爆宮は懷から拳銃を取り出し構える。

けどそんなことはとくに知っていた。

最終兵器が懷にしまっておりある銃だってことは八分ほど前から知って

いる。

だから俺はわざと出せるように攻撃を緩くした。
最終兵器を出してもらうためにわざと攻撃の手を緩めたんだ。

「そんな未来はとっくに視てんだよ」

俺は、銃口と俺を結ぶ一直線上にバットを思い切り投げつけた。
そうすればもちろん爆宮の持つ拳銃に当たり吹き飛ばす。
これで事実上のチェックメイト、つまり——詰みだ。
俺は爆宮の元へと飛び移り、足払いをして無理矢理地面へと押し倒す。

「これで終わりだ。お前の負けだよ、爆宮花火」

「——ッ！ ざけんな……ふざけんなよ……。うちはこんな
とこで負けてる場合じゃ……」

爆宮は目から涙を流していた。
このポイズンカーニヴァルを優勝すれば、一つだけ願いを叶えられる。

それを叶えるために負けるわけじゃないと言っているのだろう。

「出来ればこれだけはしたくなかったんだけど……。まあこ
で負けてちゃ元も子もないんだ、やるしかねえか……」

「おい爆宮、お前何を言って——」

「最終自爆劇、バッドペイントどうぞご覧あれ——。さあ、
爆ぜようぜ」

俺はこの瞬間、後悔をした。

爆宮を押し倒した直後にセリフなんて言わずに、爆宮の心境なんか考えずに、未来を視ているべきだった。

それを爆宮が急にとびかかってきたときに気づいたんじゃないもう遅い。

考えてみれば簡単な話だった。

痛覚をなくした上で一番有益な攻撃方法とは何か。

それは当然個毒の名前通りの自爆だろう。

ダメージと引き換えに、相手を絶命させればそれは最高の成果だろう。

命さえ失わなければいくらでも治療は可能なのだ。

文字通りの神風特攻。

自爆劇の傷つけ屋。ペインター

最強の爆撃兵器は拳銃なんかじゃなくて爆宮自身だった。

「うらあああああああ！！」

とびかかってくる右腕。

その掌に爆薬が見えた。

この距離になってはそれを回避する手段さえ思いつかなかった。

ああ、死ぬんだなと今更実感した。

心の中で思ったのは死への恐怖ではなくて、柩を助けられない申し訳なさ。

俺が死んだらストレスと怪我と病気の三重苦で死ぬんだろうなと思っただ。

それは本当に情けないな、と俺はうそぶいた。
だけでもうおしまいだ、俺は死ぬ。

——ごめんな、柩

だが、いつまでたっても死を知らせる爆発音は鳴らなかった。目の前を見てみると、飛び出した右腕が止まったまんまだ。動かずに停止している右腕、生きている俺。

邪魔な右腕をどかして爆宮の表情を見てみるとやはり泣いていた。

「やっぱり……………無理だ……………。人、殺せねえよ……………」

その声は酷く弱く聞こえた。

さっきまでの狂ったような調子が嘘かのように、弱弱しい女子らしい声だった。

「なあ、うちがなんで捕まったか知ってるか？」

「知らない……………」

「うちさ襲撃したのはいいんだけどさ、殺せなくて重傷を負わせる程度で済ませてたんだ。それでさ、いざ殺すって瞬間にさ、あいつらに殺された弟や妹の顔が出てきて躊躇っちゃったんだよ」

そういえば、どこかの新聞で爆宮花火は施設を襲われた仕返しでヤクザの事務所を襲撃したと聞いた。

そこにいた弟と妹も一緒に殺されたんだろう。

生き残ったのは爆宮だけ、それで殺そうと思った。だけど殺せなかった。

「そのときに気が付いたんだ。弟や妹はこんなことを望んだんじゃないってな。だからうちは自首したんだ」

自首したというのは初めて聞いた。

「以上……意気地なしの少女の物語でした……」

それだけを言って爆宮は俺に背中を見せた。

お人よしの人でなし。

爆宮を評価するならこんな感じだろう。

俺が沈黙を貫いていると爆宮は言葉を発した。

「絵空、うちを殺せ」

「断る」

爆宮の急な提案を俺は断った。

殺せなんて言われてはいそうですか、なんて言えるわけあるか。

「なんでだよ!? こんな犯罪者だぜ、殺したってなんの文句も言われねえ! むしろ殺したら感謝されるくらいだ! だから殺せ!」

爆宮は涙を流していた。

涙を流して、必死に言葉を叫んでいた。

辛そうに、自分の胸を刺すように爆宮は叫んでいる。

それが俺にはひどく滑稽に見えた。

「ふざけんな、お前の死ぬ言い訳に俺を使うんじゃない。俺はさ、お前に——」

そこで俺は言葉を一回区切った。

「生きていてほしいんだよ」

偽りの心の一切ない本心だった。

俺は誰も殺したくないし、みんなに生きていてほしい。

人が死ぬのは悲しいし、人が生きてるのは嬉しい。

みんな平和に仲良く生きようぜ。

「だからさ、泣くのやめてもう笑えよ」

俺は笑顔で爆宮に手を差し伸べた。

それを見ると爆宮は大声で笑った。

狂ったようではなく、少女のように愉快に笑った。

それを見て、俺はやっと爆宮も元に戻ったんだなと実感して嬉しくなった。

「なあ、爆宮」

「なんだよ」

「よかったらさ、俺たちと組まないか？」

「ごめんだ」

「……………そうかい。」

まあ、わかっていただけで残念だ。

爆宮と一緒に組めたなら問題だった戦力も補えたのに。

というか今の流れ的に仲間になるだろ普通。

「で、でもだ！ アドレスくらいなら教えてやってもいいっ！

困ったときには呼べ……」

まさかのツンデレ!?

いや、でもありだな。

ツンデレっつーか………ハゼデレ?

なんか語呂悪いな。

そういつて渡された紙には爆宮のものと思わしきアドレスが書いてあった。

その下には「困ったとき以外に読んだら爆ぜさす!」と書かれている。

……今書いたんだな、これ。

「じゃ、じゃあな! これでとりあえず別れるぜ。次会うときまで死ぬんじゃねえぞ!」

これはいいツンデレ。

まったく最近は萌え美少女に不足しないな。

さて、俺は俺で水樹を探しに行くか。

アドレス交換してないっていうか、水樹携帯持ってないんだよな。まったく不便極まりないな。

「あ、そういえばだ。このポイズンカーニヴァルに参加してるやつの中に深い緑色のツインテールをしたやつがいるからさ、そいつとはできれば戦わないでくれ」

「どうしてだ? 知り合いとかか?」

「名前は桜木^{さくらぎ} 木香^{もか}って言ってな、うちの幼馴染なんだ。あいつはなかなか只者じゃないんだぜ。だけど悪いやつじゃあないんだ」

「わかった。あっちから攻撃を仕掛けて来ない限り攻撃はしない」

「さんきゅな。じゃあ、次こそさよならだぜ」

そう言っただけで爆宮はどこかへと去って行った。

嵐のような十数分だったな。

どっぴり疲れた、水樹の巨乳に挟まれて寝たいな。

言ったら絶対殺されるな、これ。

「さて、家に帰るか」

今日は疲れた。

もうこれ以上戦ってたまるかっての。

帰ろう、俺の家に。

戦いとは無縁のあの場所に。

家に帰る途中に水樹と出会った。

一緒にいた茶髪の子には追いつけなくて逃がしたらしい。

まあ仕方ないと茶髪の少女は諦めよう。

また今度会った時に仲間に誘うとしよう。

帰り道の中で爆宮とのかたを話した。

殺し合いになったこと。

爆宮の個毒のこと。

爆宮と実質的に仲間になったこと。

そして桜木さんと戦わないこと。

それを聞いた水樹はどこか申し訳なさそうな表情をした。
多分自分が闘いを任せたせいで俺が命を失いかけたことを思っ
てだろう。

そんなこと心配しなくてもいいのにな……。

まあ、水樹は優しいから仕方ないか。

「本当にすみません。私の能力が弱いせいで……」

「気にすんなって。俺が望んでこうしたんだからさ」

「そう……ですか。次からは私も役に立ちますから」

しゅん、と俯く水樹。

やばい、ものすごく頭を撫でてあげたい！

こんな風に思えたのは初めてだ！

だんだんと変態に目覚めていく自分に少し寒気がした。

「まあ、いいさ。俺は水樹が横にいて生きているだけで役に立
てるからさ」

「っ！ そんなこと言われても……困ります………！」

「照れてんのか？」

「違うに決まっているでしょう！ ……まったく」

とか口では言っている顔は真っ赤である。

意外と初心なんだな、と心の中でからかっておいた。

とかなんとか雑談をしている間に家に着いた。

そのとき不意に脳裏に一つの疑問が浮かんた。

……俺はあと何回この家に帰ってこれるだろうか。

不安で仕方なかった。

相手が女子でこの有様だ。

もし、相手が高坂日陰だったら。

俺は生きて帰ってこられるだろうか。

いや、違うな。

生きて帰ってこなくちゃいけないんだ。

諦めるわけにはいかない。

柩の為にも生きて帰ってくる。

——俺の命は、俺だけの命じゃないんだ

一つのことを改めて実感して俺は家へと入った。

爆宮と戦った二日後、俺は目を覚ました。

どうやら丸一日寝てしまっていたらしい。

未来選は想像以上に体力を使うんだと改めて実感した。

「私を置いて丸一日寝ていた気分はどうですか」

「二日酔いを体感した気分だよ。まあ、今まで二日酔いなんてしたことはないんだけどな」

「今日は他の有毒者を探しに行きますよ」

俺はそれに無言で頷き、欠伸をした。

それでいつも通りの朝の行動。
家に女子が居てもその辺に変化はなかった。

着替えも終わると俺は居間へと移動した。
そこにはいつも通りのエロい胴着を着た水樹の姿。
ああ、眼福眼福。

「では、行きましょうか」

水樹のそんな言葉で俺は家を出る。
今日は一昨日とは違う街の隅の方を探しに行こうと思う。
まあ考えたの俺じゃなくて水樹なんだけどさ。

「そういえばです、私とアドレスを交換しましょう」

「ん、水樹携帯持ってたのか？」

「昨日買ってきたのです。あなたが一日寝ていたものですからね」

そういつて頬をふくります水樹。

その姿がものすごく可愛いなんて口にできないな。

一昨日活躍したバットを左手に持ち替えて水樹の携帯と赤外線通信
でアドレスと電話番号を交換した。

「じゃあ今日は別行動としましょう。お互いに他の有毒者を見つ
けたら電話またはメールするということだ」

「そうだな、そっちのが効率がいい。じゃあ俺は東側に行くから
水樹は西側を頼む」

「わかりました」

そう言って俺と水樹は別行動を始めた。

相手が普通の女子であれば別行動なんてするはずないのだが、相手が水樹なら簡単にやられることもないだろうからこういうこともできる。

ある種の信頼関係だった。

さて、今日は他の有毒者に会えるかな。

出来れば会いたくないんだよなあ。

どうせ遭遇すればまた戦いになるんだろうし。

闘いたくねえなあ……。

そんな風に思っていると携帯のバイブが振動を始めた。

水樹からか、と思いつつ手に取る。

ディスプレイに表示されていた名前は水樹ではなく、爆宮だった。

『そういえばだ、高坂日陰が昨日から行動を始めたらしい。精々気を付けるんだな!』

女子からメールをしてもらうなんて随分久しぶりだな。

なんてことを思うよりも先に文面の方が気になってしまった。

高坂が行動を始めた。

それはつまり最低最悪のあいつが殺戮を開始したことに違いない。

俺はそっけない感じの返事を返し爆宮に感謝した。

出会わなければいいんだけどな……。

まあ、それも無理な話かな。

———有毒者同士は引き合う

そのときどこから何かが崩れる音がした。
爆宮のときの爆発音のようなわかりやすい戦いの音ではない。
だけど、直観的にそれが有毒者同士の戦いの音だと判断した。

俺はそこに向かうかどうかを考えてしまった。
もしかするとそこにいるのは、高坂かもしれない。
だとすれば行くことで俺も巻き込まれて殺される可能性もある。
行くか、行かないか。

そんなの……行くに決まってるだろ。

俺は人の目につかないような街の裏側を走った。
聞こえてくる崩壊の音を頼りにその場所を探す。
どこだ、どこで戦ってやがる！
切れ切れの吐息と、そんな思いが口から洩れていく。

そして音源に俺はたどり着いた。
そこにいたのは二人の男女。

一人は爆宮に教えてもらった深い緑色のツインテールの少女、桜木
木香だった。

両手に構えたナイフと拳銃。
それを見る限り攻撃をしていたのは桜木さんの方だろう。

対峙している相手、それは他でもない高坂日陰だった。
白い少し長めの髪、それを後ろでちょんまげのように纏めている姿。
そして充血している目。
水樹が言うにはこれは、常に興奮状態にあるからじゃないかららしい。

「なあなあその御嬢さんよ、なんで俺サマに攻撃なんてしてくるわけ？ 正直俺サマ戦いたくないんだけど」

「木香、それが嘘だって知ってるよ。あんたは生粋の人殺しだ」

「……まあいいや。とりあえず自己紹介とかしないか？ ああ、自己紹介よりも名乗り上げの方が正しいか」

そう言っただけで警戒する木香の前で両手を広げ戦いの意思がないことを示す。

だけどそれは傍から見ている俺でも嘘だということがわかった。こいつ本当に何考えてやがるんだ……？

「桜木木香、それが木香の名前だよ」

「桜木木香ねえ……。いい名前だな。俺は高坂、高坂日陰。お前と戦う人間だ」

そして二人は静かににらみ合いを始めた。

俺は黙ってそれを見るしかなかった。

水樹に連絡することも忘れて、見続けてしまった。

必要最低限の生命活動以外を忘れて、高坂日陰という男の戦闘を見てしまう。

奇しくも俺は誰よりも早く高坂の戦いを見た人間となってしまうた。

【殺すという】 1

俺が見始めて最初の攻撃をしたのは意外にも桜木さんだった。右手に持ったナイフを突きだしたかと思うと、切っ先が飛び出し高坂を狙う。

確かあれはワイヤーナイフとかいうものだろう。

高坂はそれを苦にせず簡単に躲す。

次は左手に持った拳銃を数発撃った。

高坂の体に少しかするが、大したダメージを与えることは出来ていなかった。

次は自分の番と言わんばかりに高坂が走り始める。

そして放たれた一撃は素手による掌底だ。

さっきの高坂と同じように桜木さんはそれをかわした。

狙いを失った掌底は桜木さんの真後ろにある、壁へと当たる。

「なっ……!？」

その壁は高坂の掌底により破壊されていた。

ちよっと穴が開いたとかではなく完全な破壊。

元に戻すとかという次元ではなく、その壁自体が完全に壊されていた。

「おいおい高坂の野郎どんな腕の力してんだよ……」

俺はその光景を見ながら小声で小さくつぶやいた。

右腕の掌底だけでコンクリートの壁が粉々だ。

あれがもし人間だったら……?」

考えるだけで背筋が凍りついた。

恐らく桜木さんも同じことを思っているんだろうけど流石に表情には出していなかった。

これは戦いだ、隙を見せたらすぐにでもやられてしまう。それが殺し合いだ。

「なんなのそのデタラメな力。ドーピングか何か？」

「いやいやあんなチャチな物に頼ったりしてねえよ。これは単純な俺サマの力だ」

そう言って近くにあったドラム缶を握りつぶした。

腕力だけじゃなくて握力まで強いのかよ……。

まさかあれが個毒なのか……？

ただの力の強化、それだけが能力……そんなことがありえるのか？

「そうですか。まあただ倒すだけだから関係ないね。じゃあ行くよ？」

そう言って桜木さんは高坂に向かって走り出した。

一見自殺行為にも見えるその行動。

だがそれは個毒のわからない状態での話だ。

「きゃはは！ いいねえ、愉快じゃねえか！」

狂ったような叫び声をあげて高坂は凶器と相違ない右腕を桜木さんに向けて振るった。

それを桜木さんは軽く回避し、左手の拳銃を撃つ。銃弾は高坂の背中を掠めてどこかへと飛んでいく。

痛みに顔を歪めることもなく高坂は続けて逆の腕を振るう。恐らく桜木さんからは見えていないが、右足もロー気味に振るわれている。

腕の力だけがあんな威力だとはとても考えられない緩いスピードとはいえ、キックもかなりの威力だろう。だとすればあれを喰らえば……。

俺は喉から声が漏れそうなのを必死にこらえた。

「木香の前ではどんなフェイントだって意味ないよ。だって全て視界の中の出来事なんだから」

「何っ？」

両方の攻撃を避けられる絶妙な位置へと飛び移る桜木さん。

左腕の掌底と右足のローキック、その二つは宙を空振り奇妙なダンスのような動きとなる。

そして、高坂の攻撃が空振ったのを見計らってワイヤーナイフの切っ先を飛ばした。

その刃は高坂の頬を切り裂く。

「クソがつ……。んだよその能力、未来予知……とは違うか。一種の反射みたいな能力か？」

「答える義務はないよ。あなたは木香の敵だから」

「そうかよ！　じゃあ勝手に俺サマで推理させてもらうぜええええええー！！」

高坂は両腕を掌底に構え、それで挟み込むように攻撃を繰り返す。

それを焦る様子なく桜木さんはひらりと避けた。
空振ったのを確認するより早く高坂は右足で蹴りを打つ。
それも桜木さんはゆらりと避け、拳銃での反撃につなげた。

「ちょこまかとうぜえなあ！」

「それが木香の戦い方。文句言わないで」

「うっせえ！」

雑に裏拳を打つがそれが当たるはずもなく体に銃弾を打ち込まれることになる。

あれだけ俺が恐れていた相手が桜木さんに圧倒されているのが意外だった。

爆宮の同級生だから俺より年下のはずだ、それが高坂を圧倒しているのは驚きとしか言えなかった。

高坂が弱いわけではない、桜木さんが強いんだ。

俺はいつしかその戦い方に見とれ始めていた。

攻撃が当たらず自分は攻撃をされ続けることに苛ついてきたのか、高坂の攻撃パターンは単調になってきていた。

掌底を打つ、蹴る、裏拳、掌底の繰り返しの一パターン。

もちろんそれが桜木さんに当たるはずもなくダメージは積み重なっていくばかりだった。

そして致命傷となる心臓付近に弾丸が撃ち込まれた。

「ぐがあ……！」

そして地面に無様に倒れこむ高坂。

辺りを血が真っ赤に染めていく。

うめき声を上げ続ける高坂、それを見下ろす桜木さん。

誰がこんな勝敗を予想しただろうか。

みなが恐れる白髪の破壊神を、ただの学生が圧倒する絵を誰が予想しただろうか。

こんなものか、と俺は誰に言うわけでもなく小さくつぶやいた。

「ぐがあ……、がはっ、くはっ」

「痛いかな殺し」

「ああ、クソみてえに痛えよ……。テメエざけんじゃねえぞ、ゴ
ラア……」

「……うるさい」

桜木さんは高坂の体を軽く蹴った。

それによりさらに血が吹き出し、床の赤色が濃くなる。

不思議と目をそらせなかった。

「冥土の土産に木香の個毒を教えてあげる。木香の個毒は、【絶^アシチパラドックス対黙視力】。視界内外にあるものとの距離を正確に測れ、なおかつそれを同時に計算処理できる能力」

つまり攻撃を避けていたのも全部距離を計算しどれくらいで避けたらいいかを全部計算していたわけだ。

てことは桜木さんの頭の中は常に計算をしていたってことになる。それをしつつ戦うのがどれだけの重圧かはわからない。

だがそれをやってのけるだけの力が桜木さんにはあったのだろう。

「へえ……そりゃあすげえ能力だ」

「最後にあなたの能力でも聞きます。さあ、言ってみて」

「……………」

これだけの状況に置かれていて高坂は口を開かなかった。

死ぬ覚悟が出来ているかのように意思は固いのだろう。

個毒を言わないってのはそれだけ言いたくない能力を持っているの
だろうな。

ん、いや待て言わないのはもしかして……？

「言わないの？　じゃあさっさと殺すしかないね」

拳銃を高坂の額に構える桜木さん。

この時点で勝負は既に決しているだろう。

銃を向けられている者と向けている者、その力関係は絶対的だ。

だからこそ桜木さんは笑顔で顔の色を染めている。

だからこそ高坂は苦痛と痛みに顔を歪めている。

俺はそれを見守るだけだ。

だからこそわかったこともある。

そう、その過程はあくまで常識での話なんだ。

直後高坂の姿が消えた。

それは一瞬の出来事だった。

銃口を構えたはずの相手が消えたのに桜木さんは反射的に立ち上がつて身構える。

桜木さんには見えていないのだろうが俺には全てが見えていた。掌底を構えて桜木さんを狙う高坂の姿がしつかりと。

「危な……………。——ッ！」

俺は声を出そうとしたのを両手で塞ぎ無理やり止めた。

ダメだ、目の前で死にそうな子がいるんだから助けなくちゃ！
だけど……………助けたら次は俺が殺される。

そんなのは嫌だ、樫が助からないのなんて嫌だ。

だけどっ！

俺が考えている間に決着はついた。

掌底を放った高坂。

立ち尽くす桜木さん。

その数秒後地面に倒れたのは桜木さんの方だった。

「あ…………あ…………。嘘…………なんで…………？」

「クソ痛かったじゃねえか、コラ。マジで死ぬかと思ったぜ」

と言って血に濡れたシャツを脱ぎ捨てた。

露出した傷口からは既に血液は漏れていなかった。

止血が完了しているのだ。

「簡単な話だ、やられているふりをしたんだよ。まあ撃たれたのは本当なんだけどな。お蔭で筋肉を動かして無理やり止血をするしかなかったじゃねえか」

そんな無茶苦茶な話があるか。

筋肉で血管の傷を塞いで止血した？ 馬鹿言ってるじゃねえ。

そんなこと出来る人間がこの世に何人いることか。

それができるほど高坂の体に筋肉がついているようには見えない。だがあの力を考えればそれほどの筋肉があることも考えられなくなかった。

どちらにせよデタラメだ。

そんな人間離れた人間、いや——人外が同じ有毒者という枠組みで存在しているのが信じられなかった。

あれと……戦わなくちゃいけないのかよ。

再び背筋に冷たいものが流れてくるのを感じた。

「あ……うう……痛い……」

「まったくよォ、死ぬ覚悟もないのに人を殺そうとすんじゃないやねえつつうの。人殺しも簡単じゃねえんだぜ？ なあ、人殺しあんよ
オ」

「木香は……人殺しなんかじゃ……」

「違わねえだろ？ テメエは予選会で何人殺したよ？」

「……………」

「けっ、だんまりか。つまんねえな」

そうだ、桜木さんも予選会を通過した人間だ。
人を殺してないはずがない。

俺はその前提条件を忘れていた。
俺たちはみんな人殺しなんだ。

だから誰も信用しちゃいけないし、信じられない。

じゃあ、爆宮は何人殺した？

あの茶髪の少女は何人殺していた？

桜木さんは何人殺していた？

全てが疑心につながり、暗鬼に結びつく。

「まあ、いい。俺サマはもうお前に興味がなくなっちまったんだ、そこで虫みたいに人知れず死んどけ」

そう言っって高坂は自分で開けた壁の穴からどこかへと去って行った。

残されたのは虫の息の桜木さんだけ。

俺は高坂が消えたのを見て、桜木さんに近づいていった。

「桜木さん、大丈夫ですか!？」

「……君……遠くで見てた人？　だとしたらなんで木香の名前を……?」

「爆宮に聞いたんだ。助けられなくて……悪い……」

「ああ、花火ちゃんに聞いたんだね。いいよ………木香が同じ立場でも助けてなかっただろうし………」

近くで見ると酷いものだった。

遠くからではちょっと脇腹を貫いた程度かと思っていた。

だが違う、桜木さんのわき腹はバスケットボール位の大きさ分がまるまるなくなっていた。

その部分がもととなかったかのようにえぐられているのだ。

本当に馬鹿みたいな力だな……オイ。

「君……名前は……？」

「絵空出月だ」

「出月くんね……。出月くん……お願いがあるんだけどさ……
……いいかな……？」

「ああ、聞ける範囲で聞いてやる」

俺の言葉を聞くと桜木さんは少しだけ顔の筋肉を緩めた。
そして両手に持っているワイヤーナイフと拳銃とポケットから取り出した銃弾を俺に手渡した。

「これあげるよ……。木香の分まで……戦って……。あ
と……これ……」

渡されたのはペンダントだった。

そこには「SHIT SUN SAKURAGI」と掘られていた。
それを俺はポケットにしまう。

「これお兄ちゃんに渡しといて……。家の場所は……。ま
あ調べてよ」

「わかった。絶対に渡す。命に代えても生き残って、絶対に届けるよ」

「よかった……。最後に会えたのが出月くんみたいな優しい人で
……」

優しい人。

俺は桜木さんが攻撃を喰らう瞬間に黙ってみていたというのにそんなことを言われる権利はあるのだろうか。

いや、あるはずがない。

あつては……いけない。

「優しくなんか――」

「それ以上は……言わないで……。お姉さんの約束」

「お姉さんって……。俺の方が年上だぜ？」

「木香……19歳だよ？」

「え、年上だったのか。いや、ですか」

「あはは……出月くんは面白いなあ……。もっと生きていたかったなあ……」

その言葉に俺は唇をギツとかみしめた。

なんで助けなかったのか。

自己保身、妹のためと言って俺は目の前の命を見捨てた。

それでよかったのか……？

俺は人の命を天秤に掛けられるほど偉くなったのか……？

「出月くん……さ守りたい人とか……いる？　それも……命を懸けて……守りたい人」

「ああ、いるよ。妹だ。俺は何に変えても妹を守らなくちゃいけ

ないんだ」

「だから……木香を助けに……来なかったんだ。それ、正しい」

「えっ？」

桜木さんの言葉は予想外だった。

俺の心を見透かしたような言葉に俺は動揺を隠せない。
流石年上の女性、といったところだろうか？

「今後も……自分の命は大切に……。命がなきゃ……妹さんも守れないから……」

俺は無言でうなづいた。

言葉にすれば涙が流れていることがバレそうだったから。
俺は言葉を飲み込んだ。

その言葉は今後の俺の行動を決めるには十分過ぎた。

「あれ……出月くんどこ行った……？ 音が聞こえない……目も見えない……。ああ、これが死ぬってことなんだ……」

言葉も聞こえないのなら、と俺は桜木さんの両手を握った。

最後まで人の温もりを感じさせてあげようかと思ったから。
これでせめてもの救いになるなら……。

「お兄ちゃん……どこお……？ 木香は……ここにいるよ……
……。暗いよお……助けてよお……」

その言葉はさっきまでの桜木さんからは考えられない程に幼い言

葉だった。

いつもみたいなクールな言い切るような言葉ではなく甘えているような言葉。

多分お兄さんにはこういう喋り方をしているのだろう。

「木香……………お兄ちゃんがないと……………」

それが最後の言葉となった。

桜木さんは静かに事切れた。

体中から力が抜け、目を閉じてゆっくりと命を失った。

俺は初めて目の前で死ぬ瞬間を見た。

両親が死んだときは目の前ではなかったから始めてだ。

だが、ここまで深い悲しみに陥るとは思ってもいなかった。

なんとも言えない虚無感。

会って二十分も経っていない桜木さんでさえ、これだ。

もし、水樹が死んだら……………？

そんなことは考えたくもなかった。

俺は桜木さんの死体を隅に移動させ人目に付きにくい位置に移動させた。

そして小さくもう一度合掌、冥福を祈った。

俺のせいで死んだと言っても過言ではない桜木さんの冥福を。

「とりあえず水樹に電話するか」

と言ってもここで会うのも気分が悪い。

あっちの場所を聞いてそこに行くでしょう。

電話帳から水樹の名前を探し、電話を掛ける。

すると電話はすぐにつながって水樹は今、街のとある喫茶店にいるということがわかった。

俺は電話を切つてすぐにそこへと向かった。

この場所を去る時に桜木さんに向かって一つの言葉を言う。

「絶対に……仇はとりますから」

「遅かったですね。私をどれだけ待たせるんですか」

息を切らして走って行ったにもかかわらず着いた途端に水樹にそう言われた。

三十分かかる距離を十分で行ったんだから少しは評価してくれよ。まあ、そんなことを水樹に言っても「言い訳ですか。見苦しい限りですね」とか言われそうだから言わないけどさ。

それから席に着いて今まであったことを話した。

高坂と桜木さんが戦っていたことを。

その結果桜木さんが負けて高坂に殺されたことを。

俺が……黙ってみていたことを。

桜木さんを見殺しにしたことを水樹に何か言われると思った。

だが水樹が言った言葉はそんなことではなかった。

「出月は見えていたことを後悔しましたか？ いえ違いますね、黙っていたことが間違いだったと思いますか？」

「……いや、間違いじゃなかったと思う」

桜木さんにもそれが正しいと言われたから。

間違いないじゃなかったといわないと桜木さんが報われないから俺はそう答えた。

それで水樹にビンタの一発位されても文句は言わないつもりだ。

俺が言っていることは自己中心的考えでまともな発想とは言えないから。

「そうです、間違いじゃありません。誰しも自分の命が一番大事なんです。出月は漫画の主人公なんかじゃありません、だから人の命を守れなかったからって恥じることはないんです」

そういう水樹の表情は柔らかかった。

俺は主人公じゃない。

だから自分が生きるために必死にいればいい。

とても水樹が言ったとは思えない言葉だな。

「ありがとな。少し、気分が落ち着いたよ」

「人の気分を鎮めるのも平和への一歩ですから」

軟水のような柔らかい笑顔で俺に微笑みかけてくれた。

それにドキッと来たのは内緒だ。

まったく、水樹もツンデレ化してきたってのか。

俺の周りツンデレ率高くないか。

「それにしても高坂さんはそんなに強かったんですか。そうなる
と流石に私たちだけでは倒せそうにありませんね」

「そうだよな。誰か仲間を作らねえと勝てそうにねえ」

爆宮を仲間に誘ったところで勝てる気がしないしな。

正直全員で束になってもあいつに勝てるかは怪しいところだ。

俺と水樹の個毒なんて使ってる間に殺されちまうだろうし、花火の個毒と武器ならまだ対抗できるだろうが素の力が違いすぎる。

俺たちが見たもう一人の有毒者、茶髪の少女もいるがそれも元が女という時点でかなり強い個毒を持っていないと勝てないだろう。

じゃあ高坂にどうやって勝つんだ……？

「どうにせよ他の有毒者に会っていくしかありませんね。今の状態で戦っても間違いなく殺されるでしょうから」

「だな。じゃあそろそろ行くか」

と言って俺が立ったそのときだった。

「ねえねえお二人さん、楽しそうだしボクも仲間に入れてよ」

茶髪にお下げをした少女が俺たちに話しかけてきた。

表情は不自然なほどの笑顔で、本当に楽しそうだと思ってきたみたいだった。

俺と水樹は顔を見合わせ、どうするかをアイコンタクトで確認する。結果とりあえず話を聞いてみることにした。

「あんたも有毒者なのか？」

「もちろん、二人のことはよく知ってるよ。絵空出月くんと、舞崎水樹さん」

弾むような声音で答える茶髪の少女。

明るい声音の裏には何か悪意があるように思えた。

流石にこれは考えすぎか……。人を疑いすぎるのもよくないよな。

「あなたの名前は日乃崎土乃さんですね」

「その通り、ボクは土乃。苗字では呼ばないでね、あんまし好きじゃないからさ」

「わかった。じゃあ土乃、お前の目的はなんだ？」

「ボクの目的？ そんなの簡単さ、このゲームを開催した人間を倒すことだよ」

俺はその目的に違和感を感じた。

だがそれは言葉にできない程度の違和感だ。

ちよっとおかしいな、と思うくらいでなんの根拠もない。

ただ、そんな目的を持った人間が二人も予選会を生き残って来れるかと思っただけだ。

深く考えるまでもないだろう。

「次だ、動機はなんだ？」

「動機はこの予選会でボクの親戚が殺されたからだよ。名前は日乃崎水華、黒い髪のツインテールの女の子だったね」

「そう……だったのか。悪いな、こんなこと聞いて」

「いいよ、気にしないで。てことでボクも入れてもらっていいのかな？」

「ああ、構わないよ。だけど、クーデターには賛成できない」

怪訝そうな顔をして聞き返してきた土乃の言葉を俺は水樹の前に話したように説得した。

それを聞いた土乃は納得したようでクーデターを諦めてくれた。これで諦めなかったら……と考えてたんだけど杞憂に終わったな。

そういうわけで仲間が一人増えた。

個毒も聞かずに誘ったが、せめて戦闘経験くらいは聞いて損はないだろう。

ということで俺は土乃に戦闘経験と他の有毒者との遭遇した話を聞くことにした。

「ボクの武器はバタフライナイフだよ。武器がこんなんだからあんまり戦いにも向かなくてね、オレンジ色の髪の有毒者に出会ったけど逃げ回るのが精いっぱいだったよ」

オレンジ色の髪の有毒者とは爆宮のことだろう。

そういえばあるとき逃げていたのも茶髪のお下げ髪の子だった気がするな。

あれが土乃だったのか。
今になって納得が行った。

「そのオレンジ色の髪の有毒者ならもう襲ったりしないだろうから大丈夫だ。爆宮はほとんど仲間みたいなものだよ」

俺がそういうと少し腑に落ちないといった表情を浮かべながら、しぶしぶ納得していた。

俺と水樹は助けようとした経歴があるからか信用しているみたいだが、やっぱり他の有毒者は信用してないみたいだな。

実際俺も土乃をまだ信用してないからその気持ちはよくわかる。

正直に言って自分から話しかけてくる人間というのは基本的に怪しい。

水樹の場合はゲーム開始すぐで誰でも構わずといった感じだった。

だが土乃の場合はどうだろうか？

ゲーム開始から三日たった今やっと俺たちに声をかけてきた。

攻撃するわけではなく、協力するために。

協力するなら普通に考えて水樹のように一日目から行動するべきだ。

一日目に街のこんな目立つところを俺と水樹は歩いていたのに出会わなかったということは探そうとしていなかったということだ。

つまり最初からこんな目的があったわけじゃないと考えられる。

ということはイコールで親戚が死んだということも嘘じゃないか……？

流石に考えすぎか。

どうもストレスで人を疑う心が増幅してるみたいだ。

良くない状態だな。

これじゃいつ水樹を疑い始めるかわかったもんじゃない。

やっぱりとりあえず信じてみるしかないだろう。

「俺たちに不満があるならいつでも抜けていい。その代り、敵になった場合は容赦はしない」

「あはは、怖いね。大丈夫だよ、ボクは裏切ったりなんかしないからさ」

そう言って明るく笑う土乃。

それは普通の女の子らしくて、有毒者ということを忘れてしまいうになる。

普通って……なんだろうな。

俺は普通から逃げ出したかった。

だけど、俺がたどり着きたかった異常はこれなのか？

——俺は……何を望んでいるんだ？

俺自身の退屈だった過去を捨てたいのか、それとも柩の明るい未来を取り戻したいのか。

目的がわからない。

生きている、意味が解らない。

「とりあえずさ、ボクの家にも来ない？ それなりのおもてなしは出来ると思うよ」

「……………」

「出月くん？」

「……え？ あっ、悪いボーっとしてたみたいだ」

「出月、まだ爆宮さんと戦った時の疲れが残っているのですか？」

「いやいや、そんなことはないよ。気にしないでいいぜ」

適当な笑顔を作って俺は言葉を返した。

そろそろ俺も目的を見つけないとこのゲームを生き残れないかもな。そういう意味で覚悟が出来てないんだろう。

俺はパチンと頬をはった。

それから土乃の案内で土乃の家へと向かうことにした。
聞く話によるとそこは土乃の家というか、性格には従兄の家らしい。
その従兄と、従兄の妹の三人暮らしのようだ。
従兄さんうらやましいなあ、とかは思っていないんだぜ。

「そういえば！」

歩いていると土乃が突然口を開いた。
何かと思い聞き返すと土乃はにやけながら言葉を口にする。

「二人は付き合ってるの？」

俺と水樹は同時にずっこけた。
相変わらず土乃は愉快そうに笑っている。

「そんなわけないだろ？ 俺なんか水樹に釣り合うかっての」

「そうです、私が出月なんかと付き合うわけないでしょう」

「……それなんか傷つくんだけど」

「知りません」

俺と水樹のそんなやりとりを見て土乃は満足そうに笑っていた。
笑いどころじゃねえよ。
まあ水樹のそんなツンデレっぽいところも好きなんだけどさ。
ああ、好きってラブじゃなくてライクね。

「ここが虚兄うつぽさんの家だよ」

とかなんとか言うやりとりをしているうちに家に着いた。
大きさは普通の一軒家程度で特にこれといった特徴が見られない。
土乃が言うにはこういう地味な家の方がいざというときに安全だから、ということらしい。
いざというとき……ねえ。

「ああ、そんなに気を張らなくていいよ。虚兄さんも李々ちゃんも今日はいないから」

李々ちゃんというのは虚さんの妹さんだろう。
実はちよつと会ってみたかったが、まあ仕方ない

上がってみると家の中は本当に普通だった。

特に目立った装飾品があるわけでもなく、だからと言って何も無いわけでもなく、ちょうどいいバランスだ。

これが意図して作られたものなら、作った人間はかなりの技術を持っているだろう。

有毒者っぽく能力名をつけるなら「ナチュラルノーマライズ普通化」とかか？
相変わらずセンスを感じないネーミングだな。

土乃の部屋へとあげられて座椅子に座る。

女子の部屋に上がるのって初めてだからなんか緊張するな。

水樹は慣れたように平常心を保って座っている（まあ、当たり前か）。

部屋はこれまた特に特徴のない、しいて言うなら女の子っぽい部屋だった。

ピンクの壁紙に、数個置かれたぬいぐるみ、それに全体的に小奇麗

な感じ。

柩の部屋がこんな感じだった気がする。

「お待たせ！ ごめんね、なかなかお菓子が見つからなくて探してたよ」

と言って両手にお菓子とジュースの入ったコップを持って入ってきた土乃。

それを部屋の中心辺りにあるテーブルに置くとさっそく一つをつまむ。

土乃も席に着いたところで話し合いが始まる。

「さっきは言ってなかったけどさ、ボク金髪の女の有毒者に狙われてるんだよね」

お菓子を口に入れながら土乃はそう言った。

金髪の女の有毒者、それは俺たちが見ていない唯一の有毒者だろう。最後の有毒者か。

これでいよいよゲームが進んだ感じだな。

「ボクが狙われている理由はわからない。もしかしたら無差別に狙っているのかもね。でも、その有毒者はとんでもなく強かった。ボクなんかじゃ三回死んでも倒せないと思う」

そう言って両手を上げる土乃。

それほどに強いなら……高坂にも勝てるのか？

土乃には悪いが金髪の有毒者は俺たちにとっては希望の光となるかもしれない。

命を狙われるリスクを犯してでもその有毒者に協力を仰ぐことは、結果的に生存への道へとなるかもしれない。

「水樹はどう思う？」

「恐らく、出月と同じ考えですね」

「やっぱりそうだよな」

俺は水樹の同意を聞いて改めて土乃へとそれを伝える。

「何さ何さ、何の話してるのかボクだけわからないんだケド？」

「驚かずに聞いてくれ」

一呼吸おいてその考えを口にした。

「その金髪の有毒者を仲間に取り入れる」

少しの間だけ部屋の空気が静まる。

そして静寂を裂いたのは土乃の言葉だった。

「それ、本気で言ってるのかい？　ボクは狙われているんだよ？
下手をすれば二人も狙われる」

「その通りだ、俺たちが狙われるそれがネックなんだ。だがな、
このゲームにはもっと残酷な殺人者がいる」

「高坂のこと……？」

「そうだ。あいつは予選会をしていないにもかかわらず異常な戦闘スキルと戦闘能力を持っている。直接その金髪の有毒者には会っ

てないが高坂よりも危険だということは絶対にありえない」

その言葉に土乃は、うんうんと頷く。

理には適っている話だから納得してもらわないと困るんだけどな。

「そして今生き残っているのは金髪の有毒者と高坂を除けば、俺たち三人と爆宮だけだ。その三人では絶対に勝つことはできない。だから結果的に死ぬ運命になる」

「だったら僅かでも可能性のある金髪の有毒者に賭けてみようってことだね」

呑み込みが早くて助かるな。

そう、どちらにせよ死ぬなら少しでも生存の高いほうにベットするのが賢明な判断だ。

だからこそ金髪の有毒者に賭けてみよう、というのが俺の考え付いた作戦。

唯一の生存できる可能性だ。

「わかったよ。じゃあ、ボクもその作戦に賛成するよ」

「ありがとな。じゃあさっそく行動開始とするか」

【殺すという】 2

それから俺たちは土乃の着替えを待って家を出た。

改めて気を引き締めていなきゃすぐにでも殺されてしまう可能性もあり得るからな。

とりあえず水樹の胸を見て、一回気を緩めるか。

「どこを見てるんですか！」

いきなりビンタされた。

相変わらずその手のネタには弱いよな、水樹。

最近容赦がなくなってきた気がするが。

まあ、これも愛情の裏返しか、と思えば不思議と気分が楽になってきた。

危ねえな俺。

「待ったー？　じゃあそろそろ行こうか」

土乃の準備ができたため、家を出る。

右手にはもちろん金属バット。

俺のピンチを救ってくれた金属バットだ。

まあバットであった必要はまったくないんだけどな。

そして水樹は袖に隠した薙刀。

土乃はバタフライナイフだったか。

なんともバランスの悪いチームだ。

銃使いでもいたらだいぶ変わってくるんだけどな。

「あ、そういえば……」

俺はポケットに入っている二つの武器を思い出した。

桜木さんからもらった武器。

ワイヤーナイフと拳銃。

俺が手にした二つの力は小さくも大きいものだった。

これがあればだいぶ戦略に幅が広がってくるな。

近距離はバット、中距離はワイヤーナイフ、遠距離は拳銃。

一人でも戦える。

桜木さんの命はここでも無駄にならない。

どうしても言い死なんて一つもない。

全ての死は何かのきっかけなんだ。

「どうしました出月？」

「いや、なんでもない」

俺の返答に少しの不満を感じながらも水樹はしぶしぶ納得したようだ。

にしてもワイヤーナイフの使い方なんてよくわからないな。

使い方くらい教えてもらえばよかった。

まあ、そんな時間はなかったか。

おいおい理解していけばいいかな。

見ていたからおおよその使い方は検討がつくし。

俺たちが土乃に案内されているのは街の奥の方だった。

普段は絶対に行かないような場所だ。

不良がたむろしていてもおかしくないのに、なぜか人影はまったくなかった。

確かにこういうところに有毒者はいそうだが……。

「水樹」

「はい？」

「怖かったら抱き着いてきてもいいんだぜ」

「苛ついたら出月を刺していいんですか？」

恐ろしく話がかみ合っていなかった。

冗談なのにさ。

いつもなら余裕でビンタかましてくるのに、他の人がいるときは冷静に返すんだよな。

流石に人の前で暴力を振るのは嫌なのかな。

そういえば水樹はなんで争いを嫌うんだろうか。

昔に何かあったのかな。

だけどそれを聞くのもなんか申し訳ないというかなんというか。まあ、いつかまたいい機会に聞くとしよう。

「そういえばです」

水樹が突然口を開いた。

「土乃さん、あなたの個毒はなんなんですか？」

あ、そういえばそれは聞いてなかったな。

水樹はそういうところにも気が付くから仲間にいてくれると頼もしい。

「ボクの個毒はね、【ミラージュソニック幻実主義】だよ。高速移動する能力ね。例えば……こんな風に」

と言って土乃は俺たちの前にいたはずなのに、気づくと後ろへと移動していた。

だが聞こえる直前までは目の前に姿があったはずなんだが……。それも含めての個毒なのか？

「気づいたかもしれないけど早すぎて残像が残るんだよね。これが弱点でもあり、長所だね」

高速移動か。

ある意味戦闘向きな能力だな。

何より俺と水樹みたいな受動的な能力じゃないのがいい。

今いる誰よりも戦いに向いた能力。

これで俺たちの戦力はだいぶ整ってきたな。

だけど俺たちの戦力は整えるのではダメだ。

バランスのいいチームでは高坂に勝てるはずがない。

俺が目指すべきなのは十二全の戦力だ。

最高の戦力で最良の戦略で最善の判断でなければ対等の舞台に立つことは出来ない。

俺は勝たなければいけない。

だとすると……。

やっぱり死んだ桜木さん以外の有毒者全員を仲間にいれるくらいしか高坂に勝つ方法はない。

この三人に爆宮に金髪の有毒者。それでやっとな最高の戦力が整う。

あとは俺の頑張り次第か……。

気が遠くなりそうだ。

「なあ、土乃。金髪の有毒者——」

「名前は峰岸^{みねぎし} 金葉^{かねは}らしいよ。ほら」

そう言って土乃は携帯の画面を見せた。

そこには目つきの鋭いすべてを敵視したような目をした女性の姿があった。

髪の色はやはり金色。

雰囲気だけ見れば女版高坂と言っても差し支えないかもしれない。

「じゃあ、峰岸さんの居場所は見当がついているのか？」

「ある程度はね。人の動きは人が良く知ってるんだよ」

そう言っ嬉しそうに携帯を弄っていた。

人の目撃情報で場所を特定してるわけか。

確かにあれだけ目立つ髪の色だったらすぐに見つかるよな。

それを言い換えれば峰岸さんだけじゃなくて、他の全員の有毒者もだ。

俺たちも常に監視されていた……？

まさか……な。

「てことであと少しで着くんだけど準備はいいかな？」

「ん、土乃は行かないのか？」

「おいおい、ボクに死ねと言ってるのかい？」

そう言って冗談っぽく土乃は笑った。

まあ、確かにそうだな。

俺たちだけで交渉に行くのか。

いや、俺だけの方がいいか。

「わかった。じゃあ俺一人で交渉に行ってくるから二人は安全な場所待機していてくれ」

「そんな！ 私も行きます！」

やっぱり水樹は反論してきたか。

そりゃ爆宮のときの例があるから当然だよな。

さてと、どうしたもんなか。

「水樹にはいざというときに土乃を守ってほしい」

「それは嘘ではありませんか……？」

そう言って俺の目を覗き込む水樹。

女の子が目の前にも忘れて単純に動揺してしまった。

それを見て水樹は肩をがっくりと落としながら言葉を口にした。

「やっぱりですか……。嘘をついても私の前では意味ないです」

「……悪い」

「謝らなくていいです。ただ一つ約束してください、『絶対に無

茶はしない』。約束できますか？」

「約束するよ。俺は絶対に無茶だけはしない」

俺は静かに水樹に笑いかけた。

何故か水樹はそっぽを向いて土乃の影に隠れた。

どうした水樹……？

「じゃあ場所だけ言うからあとはお願ひ。頼んだよ」

メールで大まかな場所を教えてもらおうと俺の行動は早かった。

一分一秒でも交渉はすませなくてはならない。

正確には、「高坂がこの場所を特定するよりも」早く俺たちは交渉を終えなくちゃいけないんだ。

見つかって襲われればその時点で全滅する可能性だってある。

そして峰岸さんがいると思われる倉庫へと着いた。

入るとそこは微かに明かりがある程度で全体的に薄暗く、心霊スポットと言われても納得するような場所だった。

俺はバットを握り直し万が一の襲撃に備える。

一步一步を慎重に踏みしめる。

まだか、まだかと一歩ずつ。

足元を見ながら音のするものを踏まないように気を付ける。

何歩か歩いているとだんだんと暗闇に目が慣れてきた。

うつすらと物の形が目に見える。

ガラスの破片なども落ちていて、よく見るとそれが人為的に仕掛けられたものとわかった。

そしてちょうど五十歩目を踏んだ瞬間だった。
倉庫の明かりが着く。

突然の光に俺は顔を腕で覆った。
その一瞬のことだ。

俺の首筋に鋭い何かが突きつけられたのは。

「動か……ないで……。動いたら……。刺す……」

俺は無言のまま両腕を上げて降参を示した。
戦う前から降参ってどんだけ情けないんだか。
だけど俺は無茶をしない約束になってるから、戦う気はないんだ。

「……要件は……?」

「交渉をしに来た。あなたとチームを組みたい」

「チーム……? そんなもの……いない……」

「高坂日陰という有毒者を知っていますか」

返事は返ってこなかった。

無言の否定、とはよく言ったものだ。

「そいつがおそらくこのゲーム中最強です。で俺たちでは到底勝てそうにないんです。高坂を倒すために峰岸さんに協力してほしいんです」

「……とりあえず……話し合いを……しよう」

そう言って首筋の鋭いものは離された。
振り返って確認するとそれはただのスプーンだった。
脅しにしては十分なレベルだな。

改めて確認した峰岸さんの姿はなかなかにワイルドな格好だった。
それでいて全体的に露出が多い格好だ。
へそはでてるし、胸が強調されるような服を着ていて、下はところ
どころ破れているジーンズ。
少々高校生には刺激が強かった。

「……そこ……座って」

と言って階段のようなところに座らせられてた。
このあたりだけ不自然に何もなくて、これがわざと作られた空間な
のだとわかった。
とりあえずは話し合いは出来る相手でよかったな。
第一段階はクリアって感じか。

「……なんで……わたしに……?」

「あなただけじゃないです。できることなら高坂以外の五人全員
でチームを組みたいんです」

と言った後に俺は高坂が桜木さんを殺したことを説明した。
それに峰岸さんは歯ぎしりをして、高坂の怒りを表情にうつすらと
出した。

桜木さんの死を使ってしまった感はあるが、仕方がない。
これで結果的に桜木さんの仇が取れるんだからそれで我慢してもら
おう。

「……そいつ……許せない……。女の子を……殺すなんて……」

「だから峰岸さん、俺たちに協力してくれないか？」

流石にそこは渋っていた。

確かに他の人間全員を信用しろと言われても難しいよな。

それに俺たちが他の人間を信用するのはわけが違う。

峰岸さんは俺たちみたいに積極的に行動するタイプではないようだから、他の有毒者を最初のメールの画像で判断する程度の情報しかないんだ。

さて、どう転んでくれるかな。

「……わかった。……協力する」

「本当ですか！？　ありがとうございます！」

それに峰岸さんは無言でうなづいた。
行動の一つ一つがクールな人だ。

「……だけど……一つ……条件」

「なんです？　聞けることなら聞きますよ」

「日乃崎……土乃だけとは……組めない」

俺はその言葉に背筋が凍った。

どういう……意味なんですか、と聞こうと思った。
だが口が開かない。

俺の中に繰り広げられるのは最悪の展開だ。

「……あいつ……わたしの幼馴染……殺した。……だから……許せない……」

「ちょ、ちょっと待ってください！ 詳しくその話を聞かせてください」

話を聞くと、峰岸さんは昔いじめられていたらしい。それを救ったのが峰岸さんの幼馴染の久木 薫さんだった。だがいじめから救ったために次の標的が久木さんになってしまう。それで最終的に久木さんは事故で死んでしまった。

だがそれは事故ではなかった。とある者によってしっかりと計画された殺人だったらしい。そのとある者、というのが……日乃崎土乃。つまり土乃のことらしい。

それを聞いても正直信じられなかった。確かに土乃はどことなく怪しい雰囲気がしていた。だからと言って人を殺していた……？ そんなのがあり得るのか。

だが峰岸さんが俺に嘘を吐くメリットがないのも確かだ。じゃあ本当に……。

「……これだけが……私の提示する条件……」

「その話が本当だという証拠は……？」

「……わたしが……あなたに……嘘を吐く理由がない」

てことは……水樹が危ない！

「峰岸さんついてきてください！ 水樹が、俺の仲間が土乃に狙われているかもしれません！」

「……！ ……日乃崎土乃が……いるの……？」

「はい、います！ だから黙ってついてきてください！」

俺は走って倉庫を出た。

俺と水樹たちが離れた場所へと走る。
そしてその場所へとたどり着いた。
だが二人の姿はない。

「クソっ！ どこに行った……？」

「……絵空くん……これ」

峰岸さんが指差した先には赤い液体が落ちていた。
つまり血液だ。

そこには血液が零れていた。
それはどこかへとまっすぐつながっている。

「急いで血を辿りましょう！」

水樹がまだ殺されていないことを願って俺は走った。
転びそうになってもなんとか体制を維持して走る。
邪魔なものはバットで薙ぎ払って、息は切れ切れになっても走った。

そして血痕が続く建物へと着いた。
だがそこはドアが固く入ることを拒んでいた。

「なんだよこれ……。ざけんな！ このっ！ このっ！」

バットで思い切り叩くが、大きな音を出すだけで一向に開く様子はない

何度も叩いても動じない。

叩いているうちに力が抜けてバットが手から離れた。

「なんだよ……。！ ふざけんなよ！」

俺は落ちているバットを取る。

そしてもう一度構えて、振りかぶった。

今度は一回で手から離れてしまう。

「まだだ……。！ まだいける！」

「……。いや……。充分。……。あとは……。わたしに……」

峰岸さんは俺の前に立つとどこから取り出した日本刀を構えた。

え……。日本刀？

峰岸さんの武器は日本刀だったのか。

にしても本当にどっから取り出したんだよ。

「……。斬る」

呼吸を整えての一閃。

それで俺が苦勞して叩いていた扉は真っ二つに切り裂かれた。
これが有毒者中二位と呼ばれる実力者の力か……。

改めて敵じゃなくてよかったと思う。

「……開いた。……早く……行こう」

先行する峰岸さんに俺は無言でついていった。

建物の中にまで入るとだんだんと戦いの音が聞こえてきた。
金属と金属が交わる音、そして人の声。

それが水樹と土乃のものと気づくのに時間はかからなかった。
土乃の楽しそうな笑い声に、水樹の悲鳴にも聞こえるうめき声。
あの平和主義者の水樹が攻撃に移れるわけがない。
防戦一方に決まってる。

一方的に攻められて。
だけど決して抵抗はせず。
ただ攻撃を受け流すだけ。

それが平和主義者の舞崎水樹という人間だ。

そして二人の姿を見つけた。
土乃は両手にフライングナイフを構えて、次々に水樹に投げていた。
それに対して水樹は薙刀で上手く払う。
しかし薙刀での防御が投げナイフの攻撃に対応しきれるはずもなく、
体中に切り傷がつけられていた。

「何してんだよ………、土乃！」

俺はそれを見ていてもたってもいられず叫んでしまった。
それにより二人の動きが止まった。
だが俺の方を向いたのは水樹だけ。
意味するのはつまり……。

「やめ——」

水樹の敗北。

水樹が俺を見た一瞬の隙で土乃は両手に持っていたすべてのフライングナイフを投げ捨て、急接近しドスと呼ばれる大きなナイフで水樹のわき腹を突き刺した。

わき腹からドクドクと血が流れ出す。

膝から倒れる水樹。

そして地面に突っ伏した。

「水樹!!」

俺は走って水樹の近くへと駆け寄った。

防御のことはまったく考えず土乃へと突っ込む。

乱暴にバットを振りかぶり土乃を水樹から離れた。

土乃が距離を取ったのを確認して、俺は水樹を抱き上げた。

近づくとき体中につけられた切り傷がより細かく見える。

そしてドスで突かれたわき腹。

これは本気でヤバイ。

素人目から見てもわかるくらいに問題だ。

血が流れ続けていてこのまま放置していれば死んでしまうとわかった。

「出月……すみません……。また……足を引っ張って……」

「そんなことはどうでもいい！　とりあえず血を止めるぞ」

と言ったものの止血するための道具がない。

とりあえず俺の服の袖をちぎって包帯のようにするか。

こんなものでは時間稼ぎにしかないが、時間を稼がないよりも何倍もいい。

「ボクに背中を向けるとはねえ。それって殺してもいいってことカナ？」

後ろからじりじりと土乃が近寄っていることがわかった。

だけど水樹の止血をやめるわけにはいかない。

文字通りの絶体絶命。

だが、俺は動揺して忘れていたが俺たちには仲間が一人増えている。

二番目の実力者、峰岸金葉が仲間にいることを忘れていた。

「……お前……殺す……。……薫の……仇……！」

「知り合いだったっけ？ ……ってああ、君あの雑魚虫くんの幼馴染だね。あはは、忘れてたよごめんね」

「……絶対に……殺す……！」

峰岸さんの日本刀と土乃のドスが交わる。

数秒のつばぜり合いの後に、峰岸さんの右足が土乃の体を捉えた。跳んだ土乃の体に逆の足での回し蹴りを打つ。

そしてそのまま一閃。

土乃の体に赤い一文字が刻まれた。

「うああああ……!!」

痛みに呻く土乃。

それにゆっくりと歩み寄る峰岸さん。

その画には圧倒的な実力差が見えた。

捕食者と被食者。

その差は埋まらない身体能力の差だ。

「なーんちゃって」

「……え……?」

埋まらないのは身体能力だけでの差だ。

個毒がある場合はその差は水泡へと帰す。

土乃の持っている高速移動の個毒を知らなかった峰岸さんは完全に油断していた。

距離を取っていて、しかも自分が完全に攻勢だったからこそその油断。

峰岸さんのわき腹にも土乃のドスが刺さっていた。

しかし水樹のように峰岸さんは倒れなかった。

崩れかけた体をなんとか維持して、無理やり体をひねり日本刀で土乃の右腕を切る。

右腕が切り落とされても平然としている土乃。

その姿はまるで悪魔だった。

「あはははははは！ どうしたよ、峰岸金葉！ ボクの右腕を切り落としただけで満足かい？ こんなんじゃないけど死ぬくないね！」

「……狂ってる。……なんで……こんな」

峰岸さんは震えていた。

目の前の狂人を見て、自分の力の及ぶところではないとおびえている。

実力だけでは峰岸さんは第二位かもしれない。

だが、個毒を含めて第二位ではない。

そして土乃は自分の切り落とされた右腕を元々くっついていた部分に付けるとそこから引っ付いて右腕は元通りになった。

あまりにも異常なその風景に俺は目を点にした。

俺だけじゃない。

峰岸さんもわずかに見えていた水樹も同じ反応をしていた。

おい……土乃は何個の個毒をもってやがんだよ……。

腕がくっついた……？

そんなのは流石に異常を超えている。

誰がそんな能力を倒せるっていうんだよ……。

「出月……私の傷はどうですか……？」

「あっ——」。悪い！今のところはなんとも言えねえな……。
血が止まらねえ」

傷口は5cm程度だ。

縫うっていう手もあるんだが、まず手元に糸と針がないし、あったとしても俺にその技術がない。

どうすればいい……、どうすればいいんだ……！

「……っ！ ……痛い。」

俺の横へと転がってきた峰岸さん。
日本刀は既に折れていた。

体中に刺されたあとが痛々しく残っている。

だが傷口の一つずつが浅いため致命傷には至ってはいないようだ。

しかし状況はよくなっていない。

むしろ悪化の一途をたどるばかりだ。

どうすればいい……。

そこで俺はポケットの中に入っているものを思い出した。

拳銃。

これで土乃を倒すことはおそらく不可能だ。

だが、倒すための策をもたらすには十分。

「そこだ！！」

俺は叫ぶと同時に土乃の真上へと銃弾を数発放った。

そこにはクレーンのようなものが吊り下げてあって、それを狙ったんだ。

当たるかどうかは分の悪い賭けだった。

だけどやるしかない。

やらなければ殺されてしまう。

クレーンに銃弾が命中する。

そこから廃材と鉄骨が落下し、土乃を狙う。

「チィッ！」

ガッシャアとかなり大きな音が鳴り響いた。

次々と落下する鉄骨。

巻き起こる砂埃。

俺は賭けに勝った。

「よっしゃ……これで……」

俺の希望の言葉はどこかへと消えた。

「嘘……だろ」

鉄骨の上に上ってくる土乃の姿が見えた。

そして一歩ずつ降りてくる。

王宮から歩く王様のように一歩ずつ、一歩ずつこちらへと向かってきた。

もうダメだ……。

と俺は心の中で思った。

峰岸さんが黙って立ち上がる。

折れた日本刀を捨てて、素手で構えを取った。

「……う……うあああ!!」

叫びながら突っ込む峰岸さん。

それを土乃は笑いながら回避し、横腹を思い切りけりつけた。
体勢を崩した峰岸さんはそのまま横へ倒れる。

「あははははは!」

倒れた峰岸さんを嘲笑う。

そしてその髪を掴んでしゃべりかけた。

「どうしたの？ 君の大嫌いなボクはここにいるよ？ 殺さないの？ 殺せないんだよね？ あはははは！」

思い切り地面へと叩きつけて、ニタリとこっちを向いた。

そしてまた一歩近づく土乃。

圧倒的な力の差。

さっきまでは逆だったはずのポジションがいつの間にか逆転していた。

俺は水樹を止血するので精いっぱいだ。

攻撃なんてできない。

出来たにせよ大した対抗もできずに水樹が殺されるに違いない。
絶対的な絶望。

だが俺はその中に一つの希望が見えた気がした。

俺の視界の隅に映ったのはオレンジ色の爆発娘だった。

より正確に場所を言うなら土乃の右斜め後ろ。

そこにその少女はいた。

走っている姿が俺の目には見える。

土乃にとっては死角だが、俺には見える。

救世主の姿が俺には見えている！

「ちよつとそこのお前——」

そして少女は決め台詞を口にした

「————爆ぜてみようぜ」

急いで振り向いた土乃。

だが土乃が気が付いたときにはもう遅い。

爆発娘、爆宮は小型ダイナマイトを投げて土乃に攻撃を開始していた。

花火なんて揺動はなしの本気の攻撃だ。

軽快なステップで土乃を通り越すと峰岸さんを抱えて俺たちの元へと爆宮は飛んできた。

「よう、絵空。助けに来たぜ」

ニカツと笑う爆宮。

その笑顔は女神のように見えた。

俺はその表情を見て体中の緊張が解けたのがわかる。

「ありがとな、爆宮」

「か、感謝とかしてんじゃねえよ！……ってその女どうしたんだ？」

「そうだ！ 水樹がわき腹を突かれて血が止まらないんだ！ 何か止血するもの持ってないか！？」

俺がそう言うのと花火はうーんと首をひねって考え始めた。

そしてポケットからライターを取り出すとおもむろに水樹の元へと近づいて……。

「っておいおい！ 何してんの！？」

「傷口を焼いて無理やり止血する。おい、巨乳のお姉さん、少し痛いから我慢しろよ」

傷口へとライターを近づけ、着火。

水樹のうめき声が聞こえたが俺は見るだけだった。
見る見るうちに止血は進み、一分後には完全に傷口はふさがっていた。

「まあ、あくまで応急処置だ。安心はできないぜ」

「ああ、わかった。ありが——」

「———だああ！ 礼はいい！ 黙って目の前のあいつを倒すぜ」

「そう……だな」

俺と爆宮は構えて土埃の中にいる土乃を睨む。

数秒経っても土埃は晴れない。

そして一分が経過した。

その頃には流石に土埃も晴れて土乃が姿を表していた。
体にダメージを受けた様子はない。

少しだけ砂をかぶったようで全体的に灰かったような色になっているが大した変化じゃない。

そして土乃はニタリと笑うとドスをしまってフライングナイフを両手に構えた。

「4対1かぁ。流石にちょっと厳しいね。じゃあとりあえずここはお開きにしちゃおうカナ」

「おいおい、うちらが逃がすと思うか？」

「あははっ、そんなこと流石に思っていないよ。でもね、逃がしてもらおうカナ」って思ってたさ」

言っていることがちぐはぐだ。

結局逃げるのか逃げないのか、目的がはっきりしない言動。それこそが土乃らしいのかもしれないが……。

そしてしびれを切らした爆宮が両手に構えた爆弾を投げつけた。

土乃はそれをひょいと、避けてまたケラケラと愉快そうに笑う。攻撃が当たらないもどかしさが俺たちの苛つきを増幅させる。

「まあまあ焦らないでさ。ボクが逃げるのをゆつくりと見とくといいよ」

そういった直後またしても俺たちの目の前で予期しないことが起きた。

土乃の体が真上へと上昇していったのだ。浮遊。

それが今の土乃のしていることをはっきりと言葉にしたものだろう。

「おい絵空、あいつの能力はなんなんだよ一体……」

爆宮もそれを見て動揺していた。

それでも上昇は止まらない。

土乃の体は上昇し続け、最終的には天井へと達した。

「あははっ、これがボクの有毒者としての器だよ。君らとは規格が違うのさ」

そう言って土乃は天井からどこかへと逃げて行った。

俺たちは逃走を黙って見逃したのだ。

完全な敗北だった。

俺たちはなす術もなく蹂躪され続け、そして逃走された。

これ以上の敗北があるだろうか。

しかし俺と爆宮の表情と裏腹に峰岸さんの顔にはまだ戦いの色が濃く残っていた。

まだ戦いは終わってないといわんばかりの表情だ。

「……あいつは……まだいる。……わたしは……あいつの……能力が……わかった」

「何っ!? あいつの能力はどんなものなんだ!？」

「……ちょっと……うるさい。……うるさいの……わたし……嫌い」

それだけ言うと峰岸さんは目を閉じた。

精神を集中させてるつもりでも言うのだろうか。

ドアを切り裂いたときと同じく折れた日本刀を構えて、静かに息をしていた。

「……そこ!」

そして折れた日本刀を思い切り真横へと投げつけた。
直後小さなうめき声がして、日本刀はどこかの空間へと刺さった。
よく見るとそこには人の姿があった。

それは見慣れた姿だった。

着崩した制服に茶色のお下げ髪。

そうさつき逃走したはずの日乃崎土乃、その人物がそこにいた。

「なんで土乃があそこに……？」

右腕に刺さった日本刀を強引に引き抜くと近くに適当に投げ捨てた。

そして傷ついた右腕を抑えながら口をゆっくりと開く。

「峰岸金葉……なんでボクの個毒に気付いたのかな？」

「……そんなの……簡単。……お前が……起こした……全ての現象を……まとめたら……答えはそれになった」

高速移動。

傷の修復。

ポーカーフェイス。

明らかに鉄骨の下敷きになったはずなのに普通に上ってきたこと。
そして上昇していったこと。

これらは全てありえないことだ。
とても一つの能力では起こしえない。
だからこそその逆転の発想だ。

実際に土乃は何一つしていない。

すべてが幻想だったとしたら。

起こった現象全てに理由がつくんだ。

だから土乃の本当の個毒は「他人に幻覚を見せる能力」。
全てがまやかしかつたのだ。

「大分計画がくるっちゃうなあ……。仕方ないかな、計画を次の段階に移すとするかな」

右腕の痛みをこらえながら引きつりそうな表情で笑っていた。

右腕の指を口元へと近づけ、口笛を吹いた。

何が起こるかと思ったが一向に何かが起こる様子はない。

はったり……。か？

「これで君たちには制限時間がつけられたよ。三分だ、三分以内にボクを倒してここから逃げなきゃ君たちはゲームオーバーになる」

「どういふ……。意味だよ」

「意味なんて考えずにさ、さっさとボクを殺しにきなよ」

だからと言ってすぐに攻めに転じられるほど俺たちの状況は優位にあるわけではなかった。

幻覚を見せる能力を土乃が持っている以上は下手な行動は控えるべきだからだ。

幻覚を見せる能力ではあっても、おそらく範囲は自分自身だけ。

だとすれば土乃本人が動いたことによって起こる現象には対応できないはずだ。

たとえば土乃が動けばその地面に足跡が残る。

幻覚が動いてもそこに足跡は残らない。

つまりしつかりと見ておけば行動されることはないのだ。

そして同時に幻聴を聞かせることはできないのだ。

だから音に注意をしていれば場所を見逃すことはない。

つまり、こっちから動けばあっちは動くチャンスを得るのだ。

そのせいで今の硬直が起こっている。

俺たちは動けないから、土乃は動く必要がないから。

この硬直を打ち崩すためには俺たちが動くほかない。
だが動けばあっちの幻覚が発動される。

おかしなパラドックス。

絶対に攻撃ができない矛盾。

攻撃が攻撃のきっかけにされる事態。

「爆宮、何かいい案はないのか？」

「爆発物類は使えないとなるとうちはだいぶ弱くなるんだぜ？」

「だよな……。峰岸さんは？」

峰岸さんは無言で首を横に振った。

水樹は聞くまでもない。

じゃあ俺は……。

バットを投げるしか能のない俺に何かができるわけがない。

「……一つ……だけ……方法がないことも……ない。……だけど

……それは……あなたたちまで……危険にさらして……しまう」

その方法があるとするればそれが峰岸さんの個毒なのだろう。
俺たちまで危険にさらすということは、広域攻撃型の能力か？
全く予想はつかないが、その予想は今するべきものじゃないことは
よくわかった。

俺はダメ元でポケットをあさる。

右ポケットにはさっき銃弾を放った拳銃が入っていた。
じゃあ逆のポケットは？

そこに入っていたのはワイヤーナイフだった。

こんなんで何ができるっていうんだよ……！

……いや、待てよ。

これならいけるのか？

ワイヤーナイフの噴出時にする音はほとんど無音だ。

そして秒と掛からずに目標へと届く。

つまり、かなりの確率で不意打ちには成功できるというわけだ。

だから重要なのはタイミングだ。

ワイヤーナイフというのはその名の通りワイヤーの付いた刃を飛ば
す武器。

土乃に当てることに成功すれば幻覚に騙されることなく攻撃するこ
とができる。

するからには一回、その一回で絶対に当てなくてはいいけない。

「爆宮、頼みがある」

「んだよ」

「右へ思い切りダイナマイトを投げてくれ」

「はあ！？ 今の状況がわかって言ってるのか！ そんなことしたら――――」

「わかってる。だから、ダイナマイトに火はつけなくていい。つける真似をして投げてくれればいいんだ」

「はあ？ ……まあ、いい。うちは絵空を信じるからな！」

そう言ってポケットからライターとダイナマイトを取り出した。そしていかにも着火しているような動きを見せる。大きく振りかぶるとそれを右側へと投げつけた。

もちろん土乃はそれに反応した。

反応した瞬間に地面からジリッという音がしたから、土乃は間違いない。そこにいる。

だから俺は躊躇わずワイヤーナイフを射出した。

「なっ」

土乃の驚きの声が聞こえるよりも先にワイヤーナイフがその体を捉えた。

しっかりと絡み付いているため幻覚は意味をなさない。

人の視覚以外の五感を操れる能力なら話は別だが、おそらく土乃の能力はそんなものではない。

だからこそ、土乃はこれで詰みだった。

「あはは、参ったなあ……。どうしようかな」

「これでお前の負けだよ土乃。未練はもうないか？」

「それはこっちのセリフだよ。君たち——死ぬよ？」

「どういう意味だ、それは？」

俺の言葉に土乃は大きく笑った。

ワイヤーナイフ越しに振動が伝わる。

何故だ、なんでこいつは笑ってんだ？

この状況でどうして笑える？

制限時間……と言ってたな。

それは何に対しての制限時間だ？

土乃の命か？

そんなわけがない。

俺たちの命のことだろう。

なんで俺たちの命が危険になる？

いや、そもそもこの人数差かつ戦力差でどうしてそんな発想に至れる。

それを埋めるだけの圧倒的な要素があるのか？

そのとき俺の中に嫌な想像が浮かんた。

そんなわけがない。

そんなことがあるはずがない。

土乃がそんなことをできるはずが……ないと言い切れなかった。

俺が思ったのは最悪の空想だ。

土乃が高坂を仲間に引き入れているなんてことは絶対にありえな

いはずだ。

「さあ、時間だ。君たちの負けだよ」

土乃がそういうのと同時に天井が割れてそこから一人の人間が現れた。

俺は反射的にワイヤーナイフを回収して、土乃の体を開放する。攻撃をやめて防御に転じるほど目の前のそいつは圧倒的な力を持っているとわかった。

「よう呪われた同類共。初めまして、高坂 日陰だ、よろしく」

それほどの力を持つ白髪の悪意が俺たちの目の前に現れた。

「そんな……嘘……だろ……？」

俺の口から自然にそんな言葉が漏れた。

そんなことは少しも思っていないのに自然に口が開いている。

桜木さんの仇が目の前にいる。

なのに俺は一步も動けなかった。

それどころか指の一本さえ動かすことができなかった。

「これがボクの切り札さ。やっぱりジョーカーは最後の最後まで取っておくものだよね」

右手にバタフライナイフを構えながら喋る土乃。

その姿はさっきまでとは打って変わって、余裕のあるものへと変化していた。

敵にすると恐ろしいが、味方にするところまで頼もしい者はいない。

それを最も体現しているのが高坂だろう。
俺からしてみれば敵にせよ味方にせよ恐ろしいけどな。

「君たちにチャンスあげるよ。今から土下座をしてボクに忠誠を誓うんだ。そうすればこの場は見逃すどころか、ボクの仲間にしてあげるよ」

ほとんど意識のない水樹を除く俺たち三人は土乃をキツと睨む。
だが恐らくそれと同時に屈服してしまおうかと考えた。
土乃の敵なのが問題なんじゃない、高坂の敵なのが問題だ。

「だけどね、ボクらの仲間になれるのは一人だけだ。一番早く土下座したやつを仲間にする。さあ、醜く裏切りあうといいさ」

きやはは、と大笑いする土乃。

俺はその間に未来を視ることにした。

爆宮と峰岸さんが裏切ることがないとはわかっている。
だからと言ってそれで俺が死ぬわけにはいかない。
そのための安全策、それが未来選の発動だ。

『三十秒後、土乃の誘いを断る。』

四十秒後、土乃が高坂に攻撃の命令を出す。

五十秒後、高坂が撤退を指示する』

よし、俺たちの安全は確保されている。

だから俺は精一杯に叫ぶとしよう。

未来よりも少しだけ早いタイミングで俺は叫んだ。

「絶対に断る！」

「死んでも嫌だ!」

「……論外……!」

未来と違うタイミングにも関わらず三人の声は一致した。

まるでそれが最初から決められていたかのように。

それを聞いた土乃は微かに笑って、口を開く。

「へえ……。じゃあ高坂くん——殺しちゃっていいよ」

そんな指示をしたところで高坂が従わないことはもう未来を視て解っている。

俺たちは安全だ。

絶対に攻撃されることはない。

「わかった、ぶち殺してやるぜ」

「なにっ!?!」

なんでだ!?!

まさか……俺が早く答えを返したから未来が変わった……? ありえねえだろ……、そんなことがありえてたまるかよ。

俺が……死ぬ?

「ざけんじゃねええええええええ!」

俺はバットを構えて高坂へと突っ込んだ。

正面に掌底の構えをするのが見える。

だけど俺は躊躇わない、どうせ死ぬなら、少しでも可能性のある未

来を選んでやる！

シヨックウェーブ
「破壊震」

高坂の掌底が俺に飛んでくるのが見えた。
俺はその瞬間に過去を思い出していた。

桜木さんの使った回避法を何故か思い出す。

あれは桜木さんの個毒があつてこそできる回避だと今更ながらに理解。

でも、なぜか今の俺にならできる気がする。

全方位を見て、数少ない行動パターンを把握した。

把握したのと同時に何をすればいいかもわかった。

俺は右下に潜り込み、高坂の攻撃を避けることに成功する。

今の感覚はなんだ……？

過去と自分が一体化したような錯覚。

これは……？

「絵空、危ねえぞ！」

爆宮の声で我を取り戻すと俺は高坂の膝の裏を思い切りバットで打った。

膝から曲がったせいで高坂の体はバランスを崩す。

俺の少し上でひゅんと言う音がした。

それが高坂の追撃の音だったことは言うまでもない。

咄嗟に右ポケットから拳銃を取り出して標準を高坂の体に合わせる。

そして引き金を引いた。

バン、と大きな音が鳴り響き俺の顔を血飛沫が濡らす。

「な……！」

高坂はうめき声を漏らしていた。

そしてくらくらと体を震わせ、俺から少しずつ距離を取る。

やっぱりだ。

やっぱり俺の体に何かが起こり始めてる。

今の銃を撃つまでの流れは俺が見たことある動きだ。

それを真似したわけじゃない。

『咄嗟に』過去に見たことのある動きを真似できるほど俺は器用ではない。

あの動きは間違いなく桜木さんの動きだ。

高坂と戦っていた時の桜木さんの動きに違いない。

避けてから銃を撃つまでのタイミングまで全部同じだ。

そんな偶然があるのか……？

高坂が下がっているのを見た俺は少しずつ後ろに下がって、爆宮たちのいる場所にまで引き返した。

「やるじゃねえか絵空。高坂相手にあそこまで動けるとは予想外だぜ」

「……絵空くん……凄い。……でも……無茶は……よくない……」

二人に褒められても俺は正直に喜べなかった。

何が起こっているのかわからないのに、それを喜ぶ気にはならない。

「ひやはは、はははは！ おもしれえじゃねえか、絵空出月！
いいねえ、最高に気に入った！ お前らはまだ殺さねえ。三日だ、
三日後また会おうぜ。それまでに精々強くなつてけよ」

「まあ、高坂くんがこう言うなら仕方ないかな。じゃあ、そういうことだよ。次に会うときには、最個毒を持ってる人間がいるとい
いネ。それじゃ、ばいばーい」

謎の言葉を残して二人は去って行った。
これで俺たちは今日も生き残ることに成功した。
最悪の敵がわかった。
それを代償に俺には最高の仲間ができた。

この四人で絶対にあいつらを倒す。
だけど、とりあえず今日は疲れすぎた。
だからもう、寝てもいいよな。

「あとは……頼んだ……」

俺はそれだけを言って意識をなくした。

【最終血戦】 1

土乃の裏切りからまた二日後、俺は目を覚ました。起きるとそこはいつも通りの俺の部屋で、あの殺し合いが嘘のように思えた。

だが俺の体に刻まれた傷が、頭の中に色濃く残る戦いの記憶が嘘であることを否定する。

とりあえず居間に行ってパンをかじるか、と考え階段を降りた。体にまだ疲れが残ってるためか階段を踏み外しかける。

疲れよりも何より頭が痛い。

これも未来選の後遺症か？

いや違う、おそらくこれは高坂と対峙した時のあのよくわからない力のせいだろう。

あれは本当になんだったんだろうか。

そんな考えの中、俺は今の扉を開けた。

「……これなんてハーレム」

居間には三日前と同じく水樹がいた。

だが三日前と違って、爆宮と峰岸さんもいる。

俺の家に女の子が三人もいるなんて初めてだな。

「朝一番、鼻の下が伸びてだらしないです」

いつもの袴とは違っておそらく峰岸さんのものであろう私服のよ
うなものを着ていた。
やはり露出度が高い。

袴のように隠れたエロスもいいがやっぱりこういうオープンなエロスも――

「人の体をじろじろと見るんじゃないありません！」

ティッシュ箱を思い切り顔面に向けて投げつけられた。

暴力反対じゃなかったのかよ。

まあ、今更こんなこと気にしても仕方ないか。

「で、なんで当たり前のようにみんないるんだ？」

「おいおい、悲しいこと言ってんじゃないよ。仲間と一緒にいるのは当たり前だぜ！」

「……私に……あの場所に……戻れと？」

「なんというかすいませんでした。まあいいんだけどさ」

諦めって大事だと思うんだよ。

可愛い女子と一緒に住んでるってことで満足しよう。

うん、それでいいはずだ。

「とかなんとか言って嬉しんだろ、絵空？」

「この状況が嫌な男がいるもんかよ。というか俺のことは出月でいい」

「そうかよ、じゃあうちのことは花火でいい」

「わかった。花火と呼ばせてもらうよ」

俺の言葉を聞くと花火はどこか嬉しそうな表情をした。
名前呼ばれるのってそんなに嬉しいのか？

よくわかんないな、女子ってのは。

「……わ、わたしも……金葉で……いい」

「解りましたがなんで頬を赤くしながら言うんです？」

「……だって……男の人に……名前で呼ばれたこと……ないし」

ああ、確かに金葉って男との関わりが少なそうだな。

金髪だから服装ちゃんとしてればお嬢様っぽく見えなくてもいいし。
実際はナンパとかされてるけど、毎回千切っては捨て千切っては捨て
てってしてそうだな。

その絵を想像したらちよつと笑いがこぼれた。

それから花火と金葉に個毒を教えてもらった。

俺が寝ていた三日の間に三人は自己紹介しあったそうで、知らなかったのは俺だけらしい。

まず花火の個毒は俺の予想通り痛覚遮断。

花火は【自爆劇】カミカゼベインターと呼んでいるらしい。

痛覚遮断と言っても効果は永続ではなくて、十分間だけらしい。

花火の爆撃を使った攻撃とは相性がよさそうだ。

懷まで潜り込んで爆発させ退避、とすればリスクなく攻撃できるかな。

続いて金葉の能力は【殺神姫】マードープリマ。

十分間限定で自我をなくす代わりに身体能力を急上昇させる能力ら

しい。

自我をなくすからあのとき使わなかったわけだ。
文字通りの最終兵器ってわけだ。

神を殺す姫というのも大げさじゃないわけだ。

「出月の能力は勝手に話しましたがよかったですよね？」

「ああ、全然かまわないぜ。むしろありがたい」

それだけを確認すると、水樹は笑った。

なんか最近水樹の笑顔を見る機会が増えた気がする。

この場所に慣れてきたってこういうことなのかな？

だったら嬉しい限りだ。

俺がそう思っていると花火が口を開いた。

「じゃあそろそろ話し合おうとしようじゃねえか。……日乃崎土乃が言っていた『最個毒』とやらについてな」

最個毒って確か土乃が去り際に言っていたやつだよな。

それが何かのキーワードになるのか？

と思ったら答えは簡単に出てきた。

土乃はこう言っていた。

『次に会うときには、最個毒を持つてる人間がいるといいネ』、と。
つまりは最個毒とは誰かが所有しえるものだということだ。

名称からして恐らく、個毒の進化したものだと考えられるだろう。

「なるほどね。個毒の進化した先……か。確かにそれを持っている人間が、いや有毒者がいれば戦況はだいぶ変わってくるだろうさ」

「……でも……発現条件も……わからない」

「それならば私に一つ考えがあります。恐らく……人の死が関係するのではないでしょうか？　もしくは大きな感情の昂ぶりですね」

「その根拠はなんだ水樹？　まさかなんの根拠もないわけじゃないだろう？」

「根拠、それは私たちの個毒の発生のルーツです。私は恐らく弟の死がこの個毒【虚式】を発現することが出来ました」

なるほど……。

俺の場合は両親の死が関係した。

そして花火はおそらく施設の子供の死。

金葉は薫さんの死だろう。

確かに個毒のルーツがそれなら、最個毒の発現条件も人の死という可能性が高いだろう。

けどだからと言ってやみくもに人を殺せばいいわけでもないだろうし……。

もしかして最古毒の発現条件は……関わりの深い人間の死か？

それだとすれば……あいつらはどうするつもりだ……。

「まさか……！」

「どうしましたか、出月？」

「土乃の従兄の虚さんと李々さんが危ないが危ない……！　二人が土乃に殺されるかもしれないんだ！」

「そんな……。いやでもあり得ますね。土乃さんにとって関わりが深い人間と言えどその二人。殺される可能性が高いのはその二人……」

「どういうことだ？ わかりやすく説明してくれ」

事情を知らない花火と金葉に虚さんと李々さんのことを説明した。すると二人も狙われるとすればその二人だと思ったようで、すぐに助けに行くことを決めた。

だが、それは中止することとなった。
いや、中止せざるを得なくなった。

『昨夜未明、獣虫市に住む日乃崎虚さんと日乃崎李々さんがお亡くなりになりました。それぞれ死因は頸動脈からの出血死と見られており犯人の捜査に当たっています』

「嘘……だろ……？」

行動が遅かった。

俺がのうのと寝ている間に既に二人は土乃に殺されていた。
クソっ……ふざけんなよ……。

自分の従兄をこんなにあっさり殺せるもんなのかよ……。

「クズだなっ！ あの日乃崎土乃ってやつは！」

「……やっぱり……あいつは……殺す」

水樹は言うまでにないにして、二人も土乃に対する怒りをたぎらせていた。

金葉さんは土乃に対する怒りが更に増したことだろう。

それにしてもこれで土乃は本当に最個毒を手に入れたのか？

俺にはそうは思えなかった。

こう言っただけは虚さんたちに失礼かもしれないが、条件が軽すぎる。親しい人だけの死だなんて、そんなもので呪いが完成するわけがない。

それならこのポイズンカーニバルなんてものが開催する前に予選会の時点で呪いが完成しているはずだからだ。

いや待て、俺は何か勘違いをしていたんじゃないか？

そうだと水樹が発現したのは弟さんの死ではない。

水樹の個毒が発現したのは、予選会で生き残ったからだ。

俺と高坂はもとも個毒を持っていたから予選会がなかったんだから、それで正しいはずだ。

「水樹、お前が個毒を発現させたのは予選会が終わってからだよな？」

「……？ ……ああ、そういうことですか出月」

「ん、どういふことだよ。しっかり説明してくれよお二人さん」

「簡単な話だよ。俺と高坂はともかく、他の五人が個毒を発現させたのは誰かの死じゃなくて予選会を生き残ったからなんだ。だからトリガーは人の死だけじゃないんだよ。それ十何か条件があるはずだ」

「……確かに……そう……かも。……だとすると……条件は？」

「だよな、それが問題なんだ。うーん……」

と言いつつも俺の中には一つの答えが出てきていた。
予選会がトリガーだったとするとどう考えてもその答えに結びついてしまう。

大量の殺人……か。
考えたくないな。

だけどそうだとすれば早く土乃と高坂を止める必要がある。

土乃の殺し方じゃあ時間がかかるが、高坂の殺し方なら時間がほとんどかからない。

下手すればこの街が戦場になるのか……。
それだけは止めなくちゃならない。

いや、待て冷静に考えろ。

この個毒の前提条件を忘れてないか？

もしかして……最個毒の発現条件は大量の殺人じゃないのか？

そうだ個毒じゃなくて、蠱毒で考えてみればいい。

蠱毒の達成条件は最後の一匹になること。

完成が一匹になることなら、一匹に近づけば自然と毒の精度は増していく。

なら最個毒の上に蠱毒という完成形がある、と考えてみればいい。

そうすれば最個毒の発現条件は解ける。

最個毒の発言条件は有毒者の数が一定の数を下回ることだ。

俺はそれをすぐに三人に話した。

それもさつきと同じように納得してくれて、話がスムーズに進む。
だとすればあいつらの次の狙いは間違いなく俺たちだ。

確実に俺たちの首を狙いに来るに決まっている。

だけどあいつらは次に会うのは三日後と言っていた。
だとすれば戦うのは明日か。

それまでに俺たちは何をするべきだ？
強化練習なんて一日で出来るわけがないし、新技の練習なんてもつてのほか。

まあ、とにかく休むべきかな。

しっかり食べてしっかり寝て、とにかく今日は休もう。
下手すれば明日で死ぬかもしれないんだ。
だから今日をしっかり楽しもう。

そうだ、柩のお見舞いに行こう。

三人もつれていけばいい。

そうすれば柩もきっと喜んでくれるはず。
決めたなら早速行動だ。

「なあ俺の妹のお見舞いに行かないか？」

三人は元気よく頷いた。

家から歩いて数十分のところに柩が入院している病院はあった。
柩が入院している203号室をコンコンとノックする。

するとはーいと言う声があったのを確認してからドアを開けた。

病室には片目が隠れた黒髪のショートカットの少女がいた。
それは間違いない俺の妹、絵空柩だった。

「よう、柩。大人しくしてたか？」

「兄さん！ それに……誰？」

病室に入ると柩が元気に迎えてくれた。

流石に後ろに三人も女の子がいるのを見ると顔を引きつらせたけどな。

というか……なんか怒ってる？

「えと三人は俺の新しい友達だ。名前は……」

「舞崎水樹です」

「爆み———はなはぜ花爆 みやび雅だぜ」

「……峰岸……金葉」

一人偽名乗ったやつがいるな。

まあ花火は一応元犯罪者だし仕方ないか。

名乗って病院中パニックになってもらっても困るし。

「怪しいかも。兄さんにそんな簡単に友達ができるわけないし」

「それかなり酷いこと言ってるって気づいてるか？」

「まさか兄さんの……愛人！」

「やめておけ、俺が殺される」

後ろを振り向くとうっすらと武器を手に構えようとする三人がいた。

お前ら病院内を戦場にする気か？
軽く笑いながらとりあえず三人を宥めておいた。

「まあとりあえず今回は信じといてあげようかな！ にしても兄さん最近あまり来てくれなかったね」

「ああ……悪かったな。ちょっと最近学校の行事が忙しくてな」

「嘘だね！ 兄さんは学校行事に参加しない！」

「否定できないのが悲しいな」

とまあ冗談っぽく言ったのはいいけどどうやって誤魔化すかな。
この通り妹は嘘を見抜くのがうまい。

だから嘘を吐くことはほぼ不可能と言ってもいいだろう。
本当にどうしたもんかな。

「……まあ、話せないなら無理に話さなくていいよ。また話せる
ときがきたら話してね」

「ありがとな、柩」

そう言っって俺は柩の頭を撫でた。

すると柩はむず痒そうに顔を赤くする。

それがたまらなく可愛く一瞬よろしくない感情を持ってしまった。

……相変わらずの破壊力だな、俺の妹。

「そこのお姉さんたちさ、兄さんのことどう思ってる？」

「変態ですね」

「雑魚だな」

「……シスコン」

「素晴らしい解答ありがとうございます！　ちくしょう、今日は俺いじめのターンかよ！」

こいつら本当に俺の仲間かよ！

三分の二が変態扱いって何さ、本当に！

「みんな面白いじゃん！　三人とも兄さんと仲良くしてあげてくださいね、お願い！」

その言葉に三人は顔をそむけて答えなかった。
おい、そこは即答すべきじゃないのかよ。
なにそれ仲良くしてくれない的な感じ！？

「へえ、三人とも……。ふうーん……」

その中で何かをわかったように微笑む樞がどこか不気味だった。
本当にこいつは人の心を見抜くことが得意なんだと思うよな。
でまあ三人ともなんなのかはよくわかんないんだけど。

「じゃあ早いけどもう帰るよ。また来るよ———また……」

俺はこのとき少しだけ思ってしまった。

「また」が来ないかもしれないということを。
考えたくなかったが、絶対に考えなくちゃいけないんだ。

俺は身の丈に合わない相手に手を出す。

その代価が命と言われてもおかしい話ではない。

俺は死ぬかもしれない。

俺は……死にたくない。

「出月、そんな顔をしていては妹さんが疑いますよ」

耳元で水樹が小さく囁く。

俺はそれに少しだけ顔が赤くなるのを感じつつ、首を縦に傾けた。
というか一瞬胸当たった気がする。
ちょっとした幸せだった。

「兄さん鼻の下伸びてます」

「うえっ！？ あー、悪い悪い」

「もう、兄さんったら！」

なんかこういうのって久しいぶりだな。

日常感というか、平和っていうか。

改めて俺がどっぷり非日常に染まっていたと実感した。

俺が望んでいた非日常は予想以上に気分の悪いものだった。

人が死んで、命のやりとりをして、人を嫌いになって、人を恨んで。
俺が望んでいたものはろくでもない。

今だからわかる、日常ってのは幸せって意味だった、ってことに。

だから俺はこの街を守る。

非日常の手から日常を守る。
守るために戦う。

殺し合いを……する。

「じゃあ、帰るよ。じゃあな」

「うんつまたね、兄さん」

「ああ———またな」

そのとき俺はどんな表情をしていたのか。
答えは知らない。

それから俺たちは俺の家に戻って、適当にご飯を作った。
そのときにわかったのだが三人は天才的に料理が下手だった。
花火と金葉はなんとなくそれっぽかったけど、水樹もできないのは
ちょっと意外だったな。

だからその間に風呂に入ってもらったり、洗濯をしておいても
らう。

もちろんラッキースケベなイベントはなかった。
あったりしたら絶対に命はなかっただろう。
まったく物騒な話だ。

にしてもこんなことをしていてもいいのか不安になってくる。
数時間後にはもう戦争が起こるっていうのに、俺たちはこうして今
を楽しんでいる。

それで本当にいいのだろうか？
今をなくしてでも未来を創るために努力をするべきじゃないのか？

「何を考えているのです出月？」

「え、ああ。今をこうして楽しんでいいのかなって思ってた」

俺は自分が無意識にそう言っていたことに少し驚いていた。

このゲームが始まる以前だったら悩み事を他人に言うことなんてなかった。

これも俺が変わったってことなんだろうな。

それにしても水樹は俺の質問になんて答えるだろうか？

今からでも何かをするべきだということかもしれない。

それでも俺は全然よかった。

むしろそれが正しいだろうから。

「まったく馬鹿ですね、出月は」

「え？ 今なんて言った？」

「馬鹿だと言ったんです。今を楽しんでいいか？ 良くに決まってるでしょう。逆に何故ダメなんですか？」

「だって数時間後には高坂たちと戦うんだしこのまま休んでいていいのかよ？」

「出月は、私たちとこうしているのが嫌なんですか？」

「嫌なわけがないだろ。俺は————」

ああ、そういうことか。

俺はこの時間を大事だと思ってしまってる。
その理由は明白だ。

またこうすることができかかわからないからだ。

「わかったみたいです。だから、今は今を楽しみましょう」

そういつたときの水樹の笑顔はいつもよりも可愛かった。

だけど、これももう見れなくなるのかもしれないと思うと胸が痛くなった。

生き残りたい、そう思っているてもそういう考えは頭のどこかに残ってしまう。

だから俺は弱いんだ。

「ありがとな、水樹。もうちょっとしたらご飯出来るからみんな呼んでおいでくれ」

「わかりました」

弱いからみんなと助け合おう。

頼りあおう。

信じあおう。

心にそう決めて、俺は今を楽しむことにした。

次の日の朝、俺たちは携帯の着信音で目を覚ました。

メールしてきた相手は土乃で、文章中には決戦の場所と時間が書いてあった。

場所はかなり大きい広場で軽く野球が三試合同時にできるような広さだ。

「いよいよって感じだな。五時間後……か」

「そうですね。気を引き締めて行きましょう」

「ふあーあ、まあ堅苦しく言っても仕方ないしもうちょっとリラックスしようぜ」

「……平常心が……一番」

男の俺より女の三人の方が肝が太いってどういうことよ。
まあ、そんなの今に始まったことじゃないか。
気にしたら負けかな。

「みんな準備は出来てるか？　しっかりとしておけよ」

「そんなの昨日の晩にしています」

「常日頃からしてるっての」

「……逆に……してなかったの？」

もうやだ、この人たち！

俺に対して絶対に敵意しかもってない！

もう、気にするのもやめにするか。

バットをいつもどおり装備して玄関を出た。

三人は俺が始めてあったときと同じ格好、同じ武器を持っていた。
戦いに行く格好はやっぱりこれだよなって感じ。

なんとなく落ち着く衣装ってやっぱりあると思うんだ。

「じゃあ、いくぜ」

俺の言葉に三人は無言でうなづいた。

これから何が起るかなんて予想が付かない。

だけど、生きて帰りたいという意志は全員一緒だ。

だから、生きて帰れるはずだ。

俺はそう信じてる。

俺は孤独なんかじゃないって信じてる。

それから歩いて三十分、指定された場所にたどり着いた。

ここには小学生か中学生のときに遊びに来たこともあったがそのときとはまるで雰囲気違って思えた。

あのときは遊び場だった。

だけど今は戦場だ。

同じ場所じゃないんだ、ここは子供の頃とは違う場所だ。

俺はバットを握りなおした。

その間に、水樹は薙刀を構え、花火は両腕にダイナマイトを構え、金葉は日本刀を構えた。

四人が武装したその瞬間、俺たちの前に一つの人影が近づいてきた。茶髪にお下げ髪のそいつは見間違えるわけもなく、日乃崎土乃だった。

「やあやあ、ご機嫌麗しいかな。ボクはあんまりいい気分じゃないけどネ」

相変わらずの調子で話す土乃。

それを見て後ろにいる金葉がギリッと齒軋りをしていた。

金葉にとっては今すぐにでも土乃を殺しに掛かりたいところだろう。だが、それをしないほうが懸命だということはわかっているようだ。

今襲い掛かって、何の罠もないはずがないからだ。

ましてや土乃の個毒は他人に幻覚を見せる能力。

この瞬間にでも俺たちの背後を取っていても不思議じゃないんだ。

「峰岸さん相変わらず怖い顔してるねえ。ダメだよ、そんなにイライラしちゃ。クールになろうよ」

「……雑魚ほど……よくほえる」

「雑魚かどうか見せてあげようか？」

「……挑発には……のらない」

「そっか。つまんなーい」

そういつて土乃が歩き出した。

それにおとなしくついて行くと広場の中央へとたどり着いた。もちろんそこには高坂の姿もあった。

この前とは違い全身を黒衣に包み白色の髪が映えている。

その姿はまるで死神のようだった。

「久しぶりだなあ、絵空。三日間楽しみにしてたんだぜえ。さあ、戦おうぜコラア」

心底愉快そうに笑う高坂。

それは遠足を楽しみにする子供のように純粹に見えた。だからこそその姿は恐ろしく見えた。

しかし俺はそれに対して一步もひるまなかった。

それどころか対抗心を更に燃やしている。
生への渴望が更に滾っている。

「そういうことだよ。じゃあ、早速戦闘と行こうカナ？」

「そうだなァ……。お前は適当にあの三人を相手にしとけ、俺は
絵空だけを相手取るぜ」

「了解だよ」

その声と同時に動いたのは高坂でもなければ土乃でもなかった。
金葉が誰よりも早く動き始め、土乃の目の前まで接近していたのだ。

「……次は……絶対に……殺す……!!」

「あーもう面倒だなあ。一対一じゃ手間が三倍になるじゃんか」

日本刀とドスがぶつかり合い金属音が広場に響いた。

俺たち三人はそれを黙ってみていた。

だが俺は高坂の言葉を思い出し、水樹と花火から距離をとった。

二人を出来るだけ戦闘に巻き込まないために離れたのだ。

狙われているのは俺一人なんだからこの選択は間違っていないはずだ。

「お前の相手は俺だけで充分だ！ さあ、こっちに来やがれ！」

「いいねえ……。お前も戦う人間になってきたじゃんかよ！ 戦
いを楽しもうぜえ！ ———って言いたいところだけどよ、ここ
は観戦に徹しねえか？」

ある程度二人から距離を……というよりも野球のグラウンド自分の距離を取ってから俺はようやく立ち止まった。

言葉を聴いてすぐに立ち止まりたかったが二人の安全も大事だ。

三対一でも勝てない勝負なら一対一であの能力が目覚めることに掛けるべきだ。

間違っても掛けるのは俺の体であって、仲間の命じゃあない。

「それはどういうことだよ……?」

「どういふも何もその通りだ。俺たちの戦いの前にちよつとした余興を見ようって話だ」

「お前……まさか!」

「おそらくその通りだ。お前の大事な仲間対俺の仲間の戦いを見ようって話さ。別に悪い話じゃないだろ? 俺が一方的な虐殺をするよりもよっぽど面白いじゃねえか」

高坂が仲間なんて言うことに少しだけ意外さを感じながらも、俺は言葉を飲み込んだ。

確かにこれは悪い話じゃない。

高坂と戦うのと土乃と戦うのではどっちがいいかなんて答えるまでもない。

しかもその上三対一で戦えるのだからこの条件をのまない理由なんてないだろう。

「……わかった。その条件を受け入れよう。その代わりだ、こっちからも条件を出させてほしい」

「あーん？ いいぜ、別に俺たちに危害が及ぶものじゃないならな」

「じゃあ言うぞ。一つ、俺とお前はあっちの戦いに干渉しない。二つ、あいつらは三対一で戦う。三つ、俺の仲間三人が勝った場合はあいつらを今日は見逃してやってくれ」

「へえ、優しいのな絵空くん。自分の身よりも仲間を大事にするなんてさあ。いいぜ、その条件呑んでやる。それを破った場合はいかなる罰でも受けるぜ」

この条件は俺にとって妥協点でもあった。

下手すればこの戦いは三人が殺されるかもしれない。

俺はそれをいかなる場合も見ただけしか認められない。

視ることも見ていることも出来るが、逆に言えばそれしか出来ないんだ。

だからせめてもの妥協点が、高坂もあの四人の戦いに関わらずにいることだった。

「じゃあこの条約も完成したところで観戦と行こうじゃねえか。おーい日乃崎、初めていいぜ！」

「まあ、と言っても既に始めてるんだけどね」

皮肉気味に土乃が答えると、金葉の日本刀が土乃を襲った。

それをドスで上手くいなしながら攻撃をよけ続ける。

防戦一方のように見えて均衡している状態だった。

「こんな遠くでみるのもあれだしよ、せっかく球場みたくスタンドまであるんだから上で見ねえか？」

「……ああ、そうだな」

条約と言うのを結んだからと言って俺が高坂を信用したわけではない。

なにしろそんな条約なんて高坂が俺を殺してしまえば全部白紙になるからだ。

だから俺はビビりながらも少しずつ未来選で未来を視ていた。

俺が突然死ぬ未来が訪れないように、警戒を緩めるつもりはない。

そしてスタンドに上がった。

スタンドと言っても言うほど高い位置にはなくて、飛び降りたらギリギリで着地できそうなくらいの高さだ。

「水樹、花火！ 金葉に協力してやってくれ！ 土乃がどんな能力を隠し持ってるかわかったもんじゃないからな！」

「了解しました。私にできることをしましょう。……と言いたいところですが」

「わかったぜ、助ければいいんだな。……って言うべきなんだろうがよ」

二人とも言葉の歯切れが妙に悪かった。

この戦いの場面で何を躊躇することが有る？

俺にはよくわからなかった。

「流石にあの二人の戦いに割って入る度胸はありませんよ。あれは金葉さんの復讐でもあるんでしょう？」

「それにこちらの力じゃ割って入れても邪魔になるだけだぜ。それこそ金葉の個毒の前では巻き添えになる可能性すらあるんだからよ」

確かにそうだった。

邪魔するのは無粋か。

だから、あの二人は高坂が離れた後も近づかなかった。

気づいてなかったのは俺だけかよ。

……かっこわるい。

「……絶対に……殺す!! ……お前だけは……お前だけは……」

「それもう聞き飽きたよ。他に言うことはないの？ つま
らないよ、そういうの」

一向に攻撃に移る気配がない土乃。

恐らく金葉の体力が切れるのを待っているのだろう。

金葉の体力がなくなったときこそが土乃の能力が真骨頂を見せると
きだ。

幻覚を見せて姿をくらし、攻撃。

そしてまたくらし、攻撃。

その繰り返しで体力がだんだんなくなり、体力がなくなったところ
で殺すわけだ。

なんて性質の悪い戦い方だ。

「……これで……行く」

「へえ、そんな武器まで持ち合わせていたとはね……。正直予想
外カナ？」

日本刀を鞘に納めた金葉が取り出した武器は、鎌だった。

恐らく水樹の薙刀と同じ様な折りたたみのものだろうが、その長さは金葉の身長の手頃くらいまでの大きさに見えた。

直接見るのは初めてだが命を刈り取る形をしているだろう、といわれ
ても納得できる形状だった。

「……あなたを……殺す……！」

大きく一步を踏み出した直後、ブンツと轟音を伴って鎌が振るわれた。

鎌は残像を残しながら土乃の体に切り傷を残した。

恐らく幻覚も使っていない生身の体に刻まれた傷からは血が少しずつ漏れ、広場の芝生を濡らしていった。

「これは結構めんどくさいかもネ。日本刀の方がよっぽど楽だったよ」

「……御託は……いい。……早く……死んで」

口では軽そうだが、状況的はそこまで樂觀できる場面ではないはずだ。

その証拠に体に刻まれる傷がどんどん増えていた。

それに対して金葉は息一つ切らしていない。

ここまでの有利な状況を簡単に作り出せるだろうか。

それは金葉の元々持っているポテンシャルの高さのお蔭で生まれるものだろう。

能力で補った強者とは物が違うのだ。

だからこそ高坂に立ち向かう一番の手段でもあった。

単純な戦闘能力で高坂と互角以上に戦えるのは金葉だけだからだ。
俺なんてちょっと未来が視れるだけのただの高校生だ。

花火も火薬を使って痛覚をなくせるだけのトリックスターにしかすぎない。

水樹に至っては能力を使う使わない以前に基本的に戦いに参加しないから数に数えることも困難だ。

それくらいに金葉のポテンシャルの高さは必要だったんだ。

「……そろそろ……終わり。……個毒を……使えば……？」

「じゃあ……お言葉に甘えて！」

一方的に切りかかっていた金葉の前から突然土乃の姿が消えた。
そしてすぐに背後へと姿を現し、バタフライナイフで金葉へと切りかかる。

「……そんなの……読めてる……」

「くはっ!？」

だがそこに金葉の持っていた鎌の柄が土乃の腹部へと直撃した。

突然のダメージに土乃は一步、二歩とよろけ始めた。

そこを狙って金葉は鎌を振り下ろす。

だが鎌は虚空を斬るだけに終わった。

また土乃が能力で姿を消したのだ。

金葉の真後ろからナイフが飛び出した。

ギリギリで反応し、それを回避。

次は両サイドからだった。
鎌を振り回してそれを弾き飛ばす。

「……隠れてないで……出てこい……！」

金葉の言葉に答えることもなく土乃はただフライングナイフを投げ続ける。

最初は回避し、弾き飛ばしていたナイフも少しずつ金葉の体に当たり始めた。

明確なダメージとなった最初の一撃は腹部への刺し傷だった。

恐らくナイフを投げたのではなく、幻覚で姿を隠して近距離から刺したと思われるその傷に金葉は小さく呻く。

そこからは少しずつ土乃にテンポを持って行かれていた。

次に足にフライングナイフで少し深い傷がつけられた。

それでほんの少しバランスを崩した隙に次は手が狙われる。

最初は利き腕の右腕だった。

一瞬の間を縫って右腕に振りかざしたナイフで切り傷を負わせた。

まるで毒が少しずつ全身に回るように金葉の体から力が抜けていっているのが目に見えた。

だが攻撃は一向に止まることはなかった。

少しずつ地味に、しかし地道にダメージを積み重ねている。

最弱が最強に勝つ手段の一つでもあるこの手段だ。

対応範囲外から有効打には至らなくとも少しずつ攻撃を積み重ねる。それはいつまでも変わることのない距離。

そして削られていく体力。

金葉がここから逆転するには何か距離を埋める一手を打つ必要があった。

他の方法なら土乃の幻覚を無効化する手段、またはその状態で大ダメージを与える手段が必要だ。

意識を騙すのが土乃の個毒だ。

それに対して金葉の個毒は無意識化で身体能力を極限まで引き上げる力。

そう考えれば金葉の逆転の手段は自然に見えてくる。

そしてそのときだった。

「……う……うお……ヴォオオオオオオアアアア!!」

金葉が大きく叫び声をあげた。

そんな姿を見るのは初めてだったが、それが自我を無くした状態であるということは用意に想像できた。

直後金葉の姿を俺たちは視覚で確認することが出来なくなっていた。次にそこに『いる』ことを確認したのは、広場の隅でした爆音によってだ。

そこに金葉が土乃を押しやったのはなんとかわかった。

「グルアアアアアア!!」

そして次は俺たちがいるスタンドの真下だ。

そこで金葉が土乃を掴んでいる姿を確認した。

さっきまで優勢だった土乃は既に全身がボロボロで、瀕死にも見える状態だった。

「これは勝負ついたかな。俺サマ的にはもうちょっと釣り合う試合をしてくれると思ってたんだけどねえ」

自分の育てたゲームのキャラクターが負けたくらいにしか思って

いないような高坂の様子。

その様子を見ればなおさら高坂の仲間という発言に違和感を感じる。こいつは結局土乃のことを仲間だと思ってるのか？それともただの駒程度にしか見ていないのか。

「痛い……なあ。そんなことされたらボク死んじゃうよ？」

「グガアアアア！！」

「おいおい、それじゃあまるで恐竜か何かみたいだよ？ まさか……本当の意味での原初化、つまり……戦うことに最も適していた状態に無意識的になってるっていうの？ それじゃあボクの幻覚が聞かないのも無理ないね……」

「グルウウウウ……」

土乃の言っていることは正しく思えた。

実際に言葉使いは獣レベルに成り下がってるし、そして一瞬で広場を往復する脚力、筋力になっている。

ある意味すべてを捨てた最強の一撃必殺となっているわけだ。これなら高坂にも……或いは。

その間も土乃への攻撃は止まることを知らなかった。

攻撃し、攻撃し、攻撃し、攻撃する。

あまりにも単純な行動だがそれに対抗する術は土乃にはなかった。

幻覚さえも、無自覚な金葉には通じない。

唯一の策も既に克服されてしまったのだ。

そして数分後、土乃の体はめちゃくちゃになっていた。

服はもはやどんな衣服だったかとも思い出せない程に破けていて、髪

はトレードマークであつたお下げもとかれていて、左腕はだらしくぶらさがっているし、体中の骨も折れていることだろう。それほどに金葉の力は強力だったのだ。

「クソ……クソ……クソクソクソクソ!! こんなはずじゃない……。ボクがこんな簡単にやられるはずが———かはっ!」

金葉の攻撃に土乃の体が吹き飛ぶ。

まるで風に飛ばされる紙のようにあまりにもあっさりと吹き飛ばされた。

「痛い……痛いじゃん……。なんなのこれ、おかしいじゃん。ボクが負けるはずがない! ボクが負けてたらなんのために虚兄さんや李々ちゃんを殺したんだ……。ボクはまだ生きる……生きるんだ……」

そして次は吹き飛ばされ、木に体を思い切りぶつけた。

木にひびが入ったのが遠くから見ても目に見えた。

「死ねよ……。死にぞこないのいじめられっ子がボクを殺そうとするなよ! ボクはまだ生きていたいんだよ! お前みたいな死に損なつたやつとは違うんだ、ボクはこれからまだ生きれるんだよ! 生き残って、ボクの理想の世界を作ってやるんだよオオオ!」

フラフラの体を持ちあげ金葉に反撃を試みるが、カウンターを狙ったわけでもないただの打撃に倒れる。

正直に言えばもう見ていられなかった。

誰の目に見てもこの勝負の勝敗ははっきりといっているからだ。

「見てられないねエ。惨め、つつーのかああいうの? 小細工に

頼った戦い方してるからこういうことになるんだぜ。俺みたいに、
とまでは言わねえが絵空みたいにもうちよつとひねった戦いかたを
してほしいね」

「……何故俺の戦いを知っている？」

「日乃崎から映像データで見せてもらったんだよ。お前と爆宮の
戦いをな」

やっぱり土乃はそういうことをしていたのか。
まあ予想通りだし今さら驚かないけどな。

それにしても高坂が俺の戦い方について評価しているのは意外だ
った。

俺は正直個毒を使って女相手だったから力技で押し切ったにすぎな
い戦い方しかしていなかった。

間違っても褒められる戦い方ではなかったはずだ。

まあ、もらえるものは正直に受け取っておくことにしよう。

というかこの分じゃ、高坂に俺の個毒はバレてるみたいだな。

となると弱点もある程度わかってるか……。

高坂との戦いは本当に厳しいものになりそうだな。

高坂の個毒はいまだにわからずじまいなんだよな。

本当に身体能力を強化するだけの個毒なんだろうか？

答えはよくわからない。

「グガアアアアアア！」

「うあっ！」

そんなことを考えてる間に金葉は土乃を地面に押し付けて、マウントを取っていた。

おいおい、これはまずいんじゃないか……？

何がやばいってさっきまでは壁に衝撃を逃がしてダメージは軽減されていた。

だが地面が背後となれば衝撃を逃がすことはほとんどないと言っていいだろう。

土乃を心配する気なんてないが、それでも流石に目の前で人が死ぬのを手放して喜ぶような人間じゃない。

相手がド外道の土乃であつてもだ。

「おい、高坂！ 土乃を助けるためだ、さっきのルールを一時的に無効にして助けに——いや、金葉を止めに行かせてくれ！」

「そうだね、日乃崎を助けるためならそれもありかな」

「さんきゅな、じゃあ——」

「だが断る」

「はあ!？」

「約束は守るためにあるんだぜ？ それをちょっとアクシデントがあつたから無しにするってのはよくねえよなあ」

「待てよ、ちょっとだと!? 土乃が死にかけてるのにそれはねえだろ！」

「まあまあ、俺は少しだけ信じてるんだぜ？　日乃崎があそこから逆転するってな」

と、高坂が言ったのと同じか遅いか。

そのタイミングで爆音が鳴った。

音の正体が金葉が地面をたたき割った音だと気づくのに時間はかからなかった。

「グルアア……………ああああ」

それを最後に金葉の体から力が抜け、地面に突っ伏した。

これが狂姫化のデメリットか。

力を無くしてただの少女になって地面に倒れこんでいる。

こうして少女が二人広場に並んだ。

二人とも動き始める様子はない。

「ほらね？　たまには君の個毒で未来を視てみたらいいのに」

「偶然……………か？」

「絶対だぜ」

あの勝負の結末は引き分けてことでいいのか……………？

と思った矢先動き出した者がいた。

それは土乃だった。

ボロボロの全身を全身で庇いながら無理矢理動いている印象だ。

「は……………は……………。これが……………ボクの実力だよ。これが……………これが……………」

そしてポケットからバタフライナイフを取り出して構えた。

金葉の体へと狙いをつけ、思い切りそれを振り下ろす。

斬りつけられると思われた金葉の体は予想外に当たらなかった。

金葉が避けたのではない、土乃が外したのだ。

「あれ……？ おかしいな……ボクの体……どうしたの……？」

目も焦点が合わないし……あれ……？」

あれだけ攻撃され続けたのだ、その過程で脳がダメージを受けていてもなんらおかしくはない。

体のダメージと相まって土乃の体は今にも倒れそうだった。

精神力だけで立っているように見える。

「……まだ……終わらない」

同じように金葉も立ち上がった。

意地と意地の戦いと言ったところだろうか。

二人とも気絶していてもおかしくないのに、二人とも立ち上がり戦おうとしている。

金葉は手に日本刀を構えて、土乃は手にバタフライナイフを構えて。二人の意地をさらけ出しあっていた。

「立ち上がるんだね……。じゃあボクも負けてけてられないや」

土乃はバタフライナイフを前に突き出した。

「……お前は……絶対に殺す」

金葉は日本刀を持ち直した。

「ボクは……」

「……私は……」

「絶対にお前を殺す！」

二人は同時に相手に向かって走り出した。
そしてそれをほとんど同じタイミングで振った。
決着は静かに着いた。

金葉は立ったままで、土乃は地面に倒れた。
これを見る限りは金葉の勝利。
俺たちの……勝ちだ。

「……わたしの……勝ち……だ……！」

「いや違うね、ボクの勝ちだよ」

「……え……？」

「金葉！」

倒れたと思っていた土乃がいつの間にか金葉の背後へと立って、
金葉にドスを突き刺していた。
それを受けて金葉は再び地面に倒れた。
土の上を赤色が染めはじめる。
それが金葉の血だというのは理解する必要もないほどよくわかった。

「ボクの……ボクの勝ちだ！ お前は負けたんだよ、峰岸金葉！」

ははは！　ザマミロ馬鹿が！　ボクに立ち向かうからだよ！」

そんな土乃の挑発にも金葉の体は指一本動かない。
それに続いて土乃も膝から倒れた。

「終わり、かねえ。よしこれで日乃崎の戦いは終わりだ。とりあ
えず今は仲間の元へと行こうぜ」

返事をすることなく俺はスタンドを飛び下り、金葉の元へと走り
出した。

生きていることを信じて走る。

そして金葉の元へとたどり着いた。
体を抱えて顔を俺の方に向ける。

「金葉！　大丈夫か！？　生きてたら……返事をしてくれ……」

出来るだけ体を揺らさないように呼びかける。

胸のあたりから流れ出す血液は止まることはない。

見るからに致命傷。

放っておけば、いや放っておかなくても死ぬことだろう。

悲しいが……それが事実だった。

「……金葉……死ぬなよ……お前まで……死ぬな……！」

「……さい……」

「……金葉？　生きてるのか金葉！」

「……うるさい。……うるさいの……わたし……嫌い」

「金葉、無事だったのか！」

「……だけど……どうせ……もう死ぬ……。……もう……。無理……」

「そんなこと言うな！ 死ぬなよ、生きろよ！」

「……無茶……。言わないで。……。無理」

未来を視れば金葉が死ぬかはわかる。

だが……。そういうことじゃない。

視れば変わるわけじゃないんだ、視てもそれは視ただけ。
視ているだけでは未来を変えることは出来ない。

「……出月……。お願い」

「なんだ？ 聞けることなら聞くぜ」

「……絶対に……。生き残って……。……。それで……。薫の墓に行つて……
恨みは果たしたって……。言っておいて……」

「わかった……。！ 絶対に……。生き残ってやるッ！」

「……。ありがとう……。……。わたしは……。……。これで……。……。限界……。……。じゃあ……。……。ね……」

「おい、金葉？ 金葉っ！ 金葉アアアアアア！」

金葉は静かに息を引き取った。

最後の顔は今まで見たことない飛び切りの笑顔。

人生の最後の最後で恨みを果たせて満足したんだろう。

よかった。

せめて、目的を果たして死ねてよかった。

だから俺がすべきは一つだ。

金葉の最後のお願いを果たす。

それだけだ！

「高坂くん……あとは頼むよ……ボクは……ちょっと休む……」

後ろから土乃の弱弱い声が聞こえた。

今まで聞いたどれよりも弱い、演技ではなく本音での声。

だがそれが金葉は殺した人間の声だと思うと急に憎らしく聞こえた。

「そうだね、じっくり休んで。あの世でさ」

「え……？」

直後、土乃の体に高坂の手が突き刺された。

引き抜かれる高坂の腕。

そこからは血が流れ出していた。

さっきの金葉とは比べ物にならないダメージだった。

助かるとかそういうレベルじゃなく即死レベルだ。

「なん……で……ボク……が……」

ゆっくりと土乃は息を引き取った。

高坂が……殺した。

「高坂アアア！！　なんで土乃を殺した！　仲間じゃなかったの

かよ!」

「おいおい、お前にとっては仲間を殺した仇なんだろう？ 俺に感謝しろよ」

「ふざけてんじゃねえぞ高坂！ なんで……土乃を……!」

「そうだな、俺と日乃崎は仲間だった。お互いを常に狙いあう仲だったよ。で俺が殺せるチャンスを得た。だから殺した」

「テメエ……!」

「だから俺は最個毒に目覚めることができたぜ。やっぱり最個毒の発現条件は仲間の死だったか」

最個毒に……目覚めた……?

前から既に勝てなかったのにそれがパワーアップしただと？
そんなこと……。

「さあ始めようぜ。三対一でかかってこいよ、俺たちは敵同士だ。
さあ————」

そのときの高坂の表情は純粹に悪。

これまで見てきた誰よりも単純に悪く見える。

その姿は……まるで悪魔だった。

「孤独になろうぜ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2858w/>

Carnival

2011年10月20日09時30分発行